
バカと居眠りとAクラス

nature

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

【Nコード】

N7700Y

【作者名】

n a t u r e

【あらすじ】

。 学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」

その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄二らと繰り広げる学園ラブコメ
デー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも……。

初投稿なので変かもしれませんがよろしくです！
作者は受験生なので更新は不定期です。
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。
嫌だ！って人はお戻り下さい。

ぶらぶらーぐ。(前書き)

はじめまして。natureです。

初投稿になります。どごぞゆるしくお願いします。

ぶるるーぐ。

春。 ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわぁ〜…。…眠いなあ…。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「…先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言う。

「…おはようっす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとす。

「実は、先生はお前を1年間見てきて「こいつは吉井と並ぶFクラス候補なんじゃないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかったからな。」

やっと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかったな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもうやめろよ」「無理っす。」「…即答か。」

「じゃ、残り頑張ってください。」

そう言っつて魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる……。

ぶろろーぐ。(後書き)

記入してありますが、更新は不定期です。

ご了承下さい。

主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175cm

体重 62kg

見た目 顔は中性的。ってかどっちかという女子。

だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によって機嫌が悪くなっていく。

眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。

只、親しい人物など、一部の人物の場合は少し抑える。

友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。

また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。

やっていいことと悪いことの区別をしっかりとつけている。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれたぐらい）

800点over。

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

150点前後。

その他は基本350前後ぐらい。(多少ばらつきはあり)

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打ってもダメージは低いが、

面、小手、胴、突きの位置(頭、両手、腹、喉)を的確に

打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。

つまり、2回の確に打つたら相手は補習行き。

腕輪

『幻影』
ミラーージュ

自分が触れているもの、自分の幻影を創りだせる。

また、創る幻影のサイズは自由である。

幻影のコントロールは、幻影が召喚獣だった場合はその召喚獣の持ち主自身。

ものだった場合は基本魁人自身。

召喚獣を創った場合、その召喚獣の本体と武器などは消える。

この状態を『透明状態』ステルスと呼んでいる。

幻影を創っている間は1秒毎に10点ずつ減っていく。

その他 中学まで剣道をやっていた。

同じく中学で剣道をやっていた(という設定)の須川と知

り合い。

何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを気が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄二は中学校で出会った。

雄二と初めて会ったときに歴史に残る大喧嘩を繰り広げて

いる。

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思っていないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で

料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもっているが、頻繁に更新されるので、

正確な記録はわからない。

召喚獣に興味を持ち、明久が手伝いをしているとき

よく召喚して動かしていたので、操作は上手い。

過去 中学の頃は「肅清」といって不良を滅していた。

黒い木刀を常に持っていたことから「黒武者」と呼ばれていた。

その理由を（本人から聞いて）知っているのは、雄二のみ。

黒武者の正体を知っていたのは、明久、雄二、健矢。

主人公紹介！（後書き）

明らかになっていく毎に更新していくつもりです。

第1話 設備で重視すること。

「そういえば、あいつはどのクラスになったかな…」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おつ、ここか…でかいな。」

入ったAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃っていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコンetc
…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走って駆け寄ってきた。

「ん？お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走ってきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」
だった。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張って勉強しましたから…。」

「へえ、そいつは殊勝なこつたな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないようでそう答えると、

「はい…。そういえば、この教室って大きいですね…。」

少ししよげている美穂は教室を見渡しつつ、こう言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだな」とか言いそうだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

そ か れ ら 少 し 経 つ て

「皆さん、席について下さい。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？時間か。」

そうは言っても席に座って話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かった美穂と話していた。

「そうみたいです…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人からお願いします。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁人くん。次ですよ。」

「…ん？そうか。ありがとな。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言う。

「いえ…／＼。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないか…。」

前の人が終わわり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わったし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメイト達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

第1話 設備で重視すること。（後書き）

いきなりコメントがきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございます！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下さった皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしております。

では、読んでいただき、ありがとうございます！

第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと1話1話の文字数が少ないかな？ってこの頃思っています。

第2話 代表さん達と顔合わせ！

「…ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経って、魁人は起きた。

「……ちょっといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席ってあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかった。」

「ま、日頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だったからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかったらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よろしく。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言うと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻っていった。

「へえ、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思ってたよ。」

「僕も、次席はもらったと思ってたけど。まだ、甘かったみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこようと思ったんだけど…。」

「今は自習したいらしいね。」

「真面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかった、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆真面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけど。ただ、結構有名だよ？緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言うと少し顔をしかめて答える。

そして、魁人は結構有名だという。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知っているらしく魁人に言う。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかって、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちよっとそれで騒いだけど…。」

「俺は自己紹介が終わったあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと言う。

「まあ、今次席になってるってことは十分な実力があるってことだよな。」

「そうだろうね。まずは緑野君を目標にやらせてもらおうよ。」

「はは、まあ頑張ってくれ。じゃあ、俺はちょっと廊下に出てくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出てくるという。

「ああ、行ってきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知った顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おい、明久、雄二！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄二」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどのクラスになったんだ？」

「てつきり僕らと一緒にと思ってたけど。」

雄二が何クラスになったか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になった。立派なもんだろう？」

「へえ〜。…ってAで次席?!うそお?!」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がらんばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のころからおかしいと思ってたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄二は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ、お前にはお見通しだったってわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻っていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ？…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思ったが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言って魁人は新校舎、そして教室へと戻っていった。

第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（前書き）

明日期末テストです。

え？勉強？ 何ソレおいしいん（殴

第3話 自習って寝るための時間でしょ？

「はあ？自習？初日からか？」

「そうみたいです。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしかけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言ったらしく、驚いた様子で言う。

「雄二…いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとな…。」

（あいつのことだからな…。A前のちょっとした仕掛けってどこか…。）

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄二の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁人くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かったら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したらどうですか？」

「ん…。課題は出てるか？」

「出ってます。プリント3枚だけですけど…。これを今日中にやれ
って。」

美穂に言われたため、課題だけはやるうと思ったのか、課題はあるか聞く。

「教科は？」

「全部数学です。」

「数学か…。ちゃっちゃんと終わらして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはり寝る気らしく、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?!もう終わったんですか?!」

始めて3分程でもう終わったらしく、寝る体制に入る。

「あれ？緑野くん？寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わってます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気でしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だったしな…。」

「だって言っても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ1枚目がやっと終わるところだった。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りにおちていた。

「でも、緑野くんって寝顔かわいいよね こうしていると女の子みたい」

「え?! / / ……そ、そうですね… / / /」

愛子が魁人の寝顔を見てそう言うと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか?!」

「いゝや、なんでもないよ　じゃあボクは戻るねえ」

愛子はおもしろいものを見つけた、というふうに笑うと、自分の席に戻っていった。

「もう…。さて、私も課題を終わらせないと…/ / /」

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気になるらしく、なかなか進まなかった…。

「…ん、ふわあゝ、もうこんな時間か…。」

魁人が起きるともう下校時刻らしく、何人が帰る生徒が出てきていた。もうプリントも回収されたらしい。

「あ、起きましたか？」

「ん、美穂か。お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、よかつたら、なんですけど…。」

「ん？どうした？」

美穂は何か頼み？があるらしく、魁人に言う。

「…一緒に帰りませんか？」

美穂は顔を赤くしつつ、そう魁人に言う。

「ん、別にいいぞ。保育園からの付き合いなんだから、そんな遠慮することないだろ。」

ただ、魁人は友達感覚で言っていると思うているらしく、そう答える。

「そうですね…。はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っっていると思うたらしく、ため息をつく。

「ちよつと緑野くん。そういう態度は感心しないなあ。」

「ん？工藤さんか。どういうことだ？」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういうって…。魁人くん、美穂ちゃんが幼馴染だからっていうただそれだけの理由で誘ったと思ってるの？」

「ああ。他にどんな理由がある？」

「はあ…。これは思った以上に強敵だね…。頑張ってね…。」

「はい…。わかってましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言う。教室を出て行った。

「？ なんなんだ？…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい！」

魁人は意味がわからない、というように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもって、すぐ後を追いかけていった。

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（後書き）

タグで主×優子とか書いといて全然優子が出せない…。

っ、次は出せると思います！

次も読んで下さると嬉しいです！

それでは！ お読み頂き、ありがとうございました！

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。

「しかし、今日の魁人くんの課題の早さには驚きました…。」

「まあな。1年の頃を知ってるやつなら皆そう言うだろう。」

只今、下校中。

「でも、美穂は俺のことよく知ってるんだから、そんなに驚くことでもないだろ。」

「あそこまで早いとは思いませんよ…。試験で数学何点だったんですか？」

「忘れた。腕輪は余裕でとれてたけどな。」

「…400点が余裕って時点でおかしいと思うんですけど…」

「そうか？……ん？」

魁人は何か見つけたようで歩くのをやめる。

「どうかしましたか？」

「…悪いけど先に帰ってもらえるか？」

「え？」

「明日に繰り越して…。」

「まあ…。いいですけど…。それじゃ、また明日。」

「ああ、悪いな。」

魁人は美穂を先に帰すと、改めて「何か」の方を見る。

「…やっぱ、人助けはしとくべきだよな。」

魁人は走って「何か」…。助けるべきと判断した所へ向かう。

「なあ、ちょっとだけだって。一緒に楽しいことしよっぜ?」

「嫌だって言ってるでしょ!?!」

「ちっ、しょうがねえ、カづくでいくか…。」

「え? ちよ、ちょっと…。」

チンピラ風の男達3人がある女子1人を囲み、迫っていく…。

「…ったく。そんなことしてて恥ずかしくねえのか?」

「ああ？…ぐあつ…！」

「おい、どうした…ぐつ？…！」

チンピラの1人が手を伸ばしたとき、不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。

更に次の瞬間には、もう1人、地に倒れていた。

…そこには黒の木刀を持った男子が立っていた。

「な、なんだお前は?!」

「ああ？てめえらごときに名乗る名前なんざねえな。俺に勝てたら教えてやるぜ？」

「てめえ、なめやがつて…！」

「…屑が。」

そう呟いた瞬間、最後のチンピラは倒れていた。

「…怪我はないか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう。」

「それはよかった。」

ガヤガヤ…

「おい、あの黒刀、もしかして…。」

「ああ、あの強さ…。」

「あの悪鬼羅刹と互角にやりあったっていう…。」

この戦い（リンチ？）を見ていた人々は男子の正体に心当たりがあるらしく、口々に呟いている。

「おっと、目立ちすぎたな…。じゃあな！」

そういつて男子は笑顔を残し去っていった。

それを見た助けられた女子は

「…かっこいい／＼／」

と顔を赤くしていた。

「つたく、また目立つちまったな…。」

「よう魁人。また噂されるようになったな。」

「…茶化すなよ、雄二。」

「まったく、困った人を放っておけないってのは不便だなあ？」

「…まったくだよ。お前との一件のせいで、もう自立したくないって思ってたんだがな…。」

翌日。

「おはよ〜。」

魁人は教室に入る。

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

「やあ、緑野くん。」

美穂、愛子、久保があいさつをかえす。

「緑野くん、今日も眠そうだね〜。」

「いくら寝ても眠気がとれなくてな…。」

他愛もない話をしていると、魁人の後ろからもう1人入ってきた。

「あ、優子。おはよう。」

「愛子、おはよう……ああ!?あなたは?!」

「ん?」

入ってきた女子は魁人を指差すと急に大声をあげた。

「ああ、お前は昨日の…。」

「え?何、魁人くん、優子と知り合いだったの?」

「ああ、昨日、ちょっとな。」

入ってきた女子は昨日魁人が助けた女子…「木下 優子」だった。

「あ、あの。昨日はありがとう。」

「大したことはしてないさ。あの後、大丈夫だったか?」

「ええ。心配してくれてありがとう。」

「昨日…？昨日、私と別れた後ですか？」

「ああ、そうだ。木下さんがチンピラにからまれてたんでな。助けた。」

「だから私を先に帰したんですね。」

「ああ、危ない目にあわせたくなかったからな。」

優子は昨日のことでお礼を言い、魁人は昨日あったことを説明した。

「でも、何か意外だな。緑野くんが人助けというか…。そういうことに首をつっこむのは。」

「困ってる人は放っておけない性分だな。女子なら尚更だろ。」

久保が少し意外だと言うと、魁人は困っている人は放っておけない性分だと言う。

「でも、なんかかっこいいよね、そういうの。優子も惚れちゃったんじゃない？」

愛子がふざけて言う。しかし優子は

「な、何言ってるのよ?! / / / そんな訳ないでしょ?! / / /

と、明らかに焦ってしまっている。

「…冗談だったんだけどなあ…。へえ、まさか優子がねえ…。」

愛子は簡単に見抜いたが、魁人は

「本当だよ。俺が女子にもてる訳ないだろ？」

と的外れなことを言っている。

「しかも木下さんみたいなかわいい人が俺に惚れる訳ないだろうが。」

「なっ?! / / / / /」

優子は顔を文字どおり真っ赤にする。

「…鈍感で、しかも天然かい？」

「ホント、罪だよねえ…。」

魁人の発言に久保と愛子は苦笑いしている。

「…まさか、優子さんが…。」

その中で、美穂は一人で何か呟いていた…。

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。(後書き)

紫苑さん、コメントありがとうございます！

やっと優子出せました…。

…優子ってこんなキャラだっけ？w

正直、今回の話は自分であまり納得がいつてません。

優子の話の件の流れが無理矢理すぎるかな？ちょっとおかしいと思
っています。

まあ、自分の文才がないのを恨むしかないんですが…。

そついうことなんでいつかちょっと手直しするかもしれせん。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂きありがとうございます！

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。

「あれ？今日はちゃんと授業受けるんですね？」

魁人が授業の用意をしているのを見て、美穂は聞く。

「ああ、たまには、な。それに…。」

「？」

「…多分授業は午前中だけだろうからな。」

「え？それ、どういうことですか？」

「午後になれば分かるさ。」

魁人はおそらく授業は午前中だけだと言い、美穂は首をかしげる。

「これで午前中の授業は終わりです。」

「ふう〜…やっと終わったか。」

「そうですね。それで、さっきのことってどういふことですか？」

「ん？いや、多分そろそろFクラスがBクラスに宣戦布告にいつてるだろうからな。」

「そんなこと、なんで分かるんですか？」

魁人が午後の授業がなくなる理由を話すと、美穂は不思議そうにする。

「なあに、ちょっと考えれば分かるさ。さて、飯でも食つか…。」

そう言うと、魁人は弁当を広げ始める。

「緑野くん、それって手作り？」

「緑野くんが料理できるなんて、意外だな。」

そうすると、愛子と久保が弁当をもって魁人の席まで来た。

「あ、ご一緒してもいいかな？」

「別に、かまわない。美穂もいいだろ？」

「はい。是非。」

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「あ、待って、アタシも！」

優子も弁当をもってこちらまで来る。

「それで話を戻すけど、緑野くんって料理できるんだね。」

「ああ、一応な。」

「あまりそういうイメージではないけどね。少しもらってもいいかい？」

「別にいいぞ。好きなもの取れ。」

「あ、アタシもいい？」

「ボクも！」

そういつて皆が魁人の弁当をとろうとする。

「あの〜、久保くんはともかく、女子はやめた方が…。」

「え、なんで？」

美穂の忠告に愛子は聞き返す。

「…女子としてのプライドが欠片もなくなりますから…。」

「え？それってどういう…。」

皆が魁人の弁当を食べると、動きが止まる。

「ん？不味かったか？」

「いや、違うと思います…。」

「…驚いたな。凄く美味しい。」

「…そうだね。さすがのボクでも、男子にこれほどの料理をつくられると…。優子なんて再起不能になってるし…。」

「…美味しすぎる…こんなの、勝てるわけ、ないじゃない…。」

久保と愛子は驚愕の表情をし、優子はなにやらぶつぶつ呟いている。

「そうか？俺的にはこういう弁当より、スイーツ系の方が自信があるんだがな…。」

「え？スイーツ？」

「1回食べましたけど、意識が飛ぶほどおいしかったです…。」

愛子は「スイーツ」という単語に興味を示す。

「デザートで一応、シュークリームなら作ってあるが食うか？」

「…普通学校のデザートでシュークリームを持つてくるかい？」

久保は普通ありえないデザートに苦笑いする。

「シュークリーム?!ボク、大好物なんだ!ちょうだい!」

「ん？…ほら。」

魁人は何か思いついたようで笑うと、シュークリームを愛子に差し出す。

ちなみに優子は美味しすぎる弁当をまた食べたため、今度はどこかへトリップしている。

「ありがとう！…」。

愛子はシュークリームを取ろうと手をのばす。

だが、届かない。

なぜなら。

「…なんでどんどん手を遠ざけていくのね。」

「ん？なんのことだ？」

ちょっとした意地悪である。

「おほ。」

「……。」

愛子が手をのばすが、その度に魁人がよけるため、愛子はシュークリームを手にいれられない。

「むっ……。早くちょうだい！」

「なら、早くとればいいじゃないか。」

底意地の悪い顔をして魁人は言う。

「魁人くん、そろそろ意地悪はやめてあげたらどうですか？」

「ん、そうだな。ほら、やるよ。」

美穂に注意され、魁人は愛子にシュークリームを渡す。

「ありがとうー！……はむっ。」

愛子はやっと手に入れたシュークリームにかぶりつく。

「おいしい……。幸せ……。」

そして愛子もトリップしてしまった。

「……あゝあ、2人とも再起不能になっちまった。そこまで美味しいか？」

「……とても美味しいと思うが。」

「慣れちまつたから……。自分じゃわかんねえ。」

こうして、昼食は2人の犠牲者を出して終わった。

この頃、屋上では別の意味で再起不能者が出ていたが…。

…関係ないっす。

「今日の午後は自習になります。」

高橋先生が教室に入りそう告げると、すぐに教室を出て行った。

「本当に自習になりましたね…。」

「な？言ったる…。」

魁人の予想は的中し、美穂は感心する。

ちなみにトリップ者2名はつい先程現世に帰ってこられました。

「一応課題ぐらいはやっとか…。」
「げ、英語かよ…。」

今日の課題は英語プリント2枚である。

「ん？緑野くんって英語苦手だったの？」

すると優子が魁人に声をかける。

ちなみに、意外と魁人と優子の席は近かったらしく、魁人の席の左前だった。

「…教えてあげよっか？」

「そうだな、そうしてもらえると助かる。」

優子の申し出を魁人は迷うことなく受ける。

「で？何が分かんないの？」

「…文の作りがまったく分からない。単語や連語、表現技法なら分かるんだがな…。」

「…それで次席をとれるってどういうことよ。」

魁人の英語の点数は150点前後である。

「この程度できてれば普通はOKだろ。Aクラスだからそう感じるだけ。」

「まあ、そうなのかもしれないわね…。いい？まずここはこの疑問詞から初めて…この文法でこれを表して…。」

「ああ、なるほど…。で、ここでこの使い方か。」

「そう。なんだ、やればできるんじゃない。」

魁人も基礎はしっかりしているらしく、少し教わるとすぐに出てくるようになった。

「いや、木下さんの教え方がいいからだよ。ありがとう。」

魁人は笑顔でそう答えると、次々と問題を解いていった。

プリントの問題はほぼ同じ部分の復習だったので、1度理解するとすらすら進められるようになっていた。

「い、いや……。じゃ、じゃあアタシは席に戻るわね……。」

「ああ、ありがとな。」

そう言うと優子は席に戻っていった。

（2人でああしているだけでこんなにドキドキするなんてね……。どうやら、本格的に惚れちゃったみたい……。って、アタシ、何考えてんの?!）

自分で考えてて恥ずかしくなったらしく、優子は顔を赤くし、自分のプリントを進めていった。

「……………」

美穂はそれを複雑な面持ちで見ていた……。

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。(後書き)

なんか、恋愛が上手くかけないっ！

誰かアドバイスを…(泣

次回も読んで下さると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

(前書き

…なんかどんどんタイトルが長くなってW

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

「ふああ〜。やっと学校終わりか…。」

魁人は大欠伸をしながら言う。

「あら？珍しいわね。ずっと起きてたんだ。今日1回も寝てないんじゃない？」

「そうだな。午後寝ようと思ってたから、午前は寝てないし…。」

「午後は何やってたの？」

「木下さんに教わったことの復習。忘れないうちに復習しようと思って。」

「緑野くんにあそこまで出来ない教科があるのは意外だったわね…。あれで次席とれるんだったら英語でもうちよつと点とれるようになれば主席でも狙えるんじゃない？」

「それは勘弁だな。試召戦争では前に出たいしな。」

「まあ、男子は皆そう言うわよね。」

魁人は優子と談笑している。

「……………」

美穂はその様子を黙って見ている。

「…いいの？このままじゃ優子に先行かれちゃうよ？」

「良くはないですけど…。でも…。」

「じゃあ、ほら！」

「えっ？…きゃっ？！」

愛子は美穂を魁人達のほうへ押し飛ばす。

「ん？美穂か。…ああ、そういえば今日も一緒に帰るんだったか。」

「え？あ、はい！そうですね…。」

魁人は昨日の約束を思い出したらしく、帰る支度をする。

「よつと…。じゃあ木下さん、また明日な。」

「ええ、また明日。」

「じゃ、行くか。」

「はい。木下さん、さようなら。」

そういって、魁人達は教室から出た。

「ちょっと悪いけど校門のところで待っていてくれるか？」

「別に構いませんが…。忘れ物ですか？」

「いや、ちよつとFクラスに用があつてな…。悪いけどちよつと待つてくれ。」

「分かりました。校門でまっています。」

「悪いな。」

そういつて、魁人と美穂は一旦別れた。

「ここか、Fクラス。…ん？」

魁人が扉を開ける前に扉が開いた。

「ん、魁人か。ちよつと良かった、ちよつと聞いてほしいことがあるんだが…。」

そこには、雄二、明久、康太、姫路がいた。

「どうした？」

「今、俺達がBクラスと戦争してるのは知ってるだろう。」

「ああ、それで？」

「実は、今Cクラスが不穏な動きを見せていてな。不可侵条約を結びたいんだが……。」

「……………」

雄二の話を聞くと、魁人は考えこんだ。

「…お前ら、Bクラスと何か条約をむすんだか？」

「よくわかったな。今適用されているのは明日の再開戦までの一切の試召戦争に関わることの禁止だけだかな。」

「…それだ。」

魁人が口を開くと、雄二は答え、魁人は笑う。

「おそらく、Cクラスで条約を結びたい、と言ったら、Bクラスがでてきて条約違反だと言っ気だろう。」

「なるほどな……。だが、BクラスとCクラスには何かつながりがあるのか？」

「あまり知られていないが……。BとCの代表は付き合っている。」

「

「…そうか。だからこつちに有利な条約を結んだわけか…」

魁人は自分の推理を話すと、雄二は理解する。

「え？どういうこと？」

だが明久^{バカ}には理解できない。

「なんかバカにされた気がするよ?!」

「しょうがないだろ。バカなんだから。」

「…お前はバカ。さっきのは俺でも分かった。」

雄二と康太に駄目押しを食らい、バカ（明久）は「ちょっと?!」
…こつちに入ってくるなよ。

「それで、どうするんですか？」

「そうだな…。条約を結びにきた、と見せかけてあいつらをはめてやるか。」

「なら、俺は邪魔だな。待たせてるやつがいるから、俺は帰るぜ。」

「彼女か？」

「んなわけなえだろ。じゃあな、上手くやれよ。」

「ああ。ありがとな。」

姫路の問いに雄二は答え、なら俺は帰ると、魁人はその場を離れた。

「けっこごう待たせちまったか？」

「悪い。待たせたな。」

「いえ…。じゃあ、帰りましょう。」

「ああ。」

そうして2人は帰っていった…。

(今日は緑野くんとけっこう話せたな……。)

一足先に帰っていた優子はもう家についていた。

今日のことをふりかえっているようだ。

そして、1つの不安なこと。

(緑野くんも、秀吉のことを知ったら、あいつに流れていっちゃうのかな……。皆みたいに……。)

男であるはずの弟、「木下 秀吉」にしか皆、目がないこと。

(嫌……!そんなのは……。緑野くんなら、そんなことは……。でも……。)

優子はその不安を振り払えずにいた。

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

(後書き

なんか、美穂があまり目立たなくなってきた…。

うーん、ヒロイン2人って難しいな…。

次回も読んで頂けると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？

登校中…

「ん？…あれは…。」

誰か見つけたようです。

「なんだ、雄二か…。」

「…自分からこつち来て、それかよ…。」

「しかし、今日は早くないか？」

このまま学校に行くとH R 30分前になります。

「ああ、やることがあるんでな。」

「ふ〜ん…。で、昨日はどうなった？」

「鎌かけたら簡単に言ってくれたよ。卑怯者もひっかかって出てきて、一網打尽だ。」

昨日あれから見事に策を打ち破り、逆に相手に痛手を与えてやったらしい。

「あいつはとり逃したが、他のBのやつ5人ちよっと、補習に送ってやった。」

停戦中だったが、先生らの審議の結果、そのB連中は今回の戦争には出れないらしい。

「成る程な……。で、Cはどうするんだ？」

「それを今からなんとかする。ちよつと用意があるから、先に行くな。」

「ああ、じゃあな。頑張れよ。」

雄二を見送り、魁人は1人で登校した。

「はよ〜。」

教室に入り、一応挨拶する。

「おはようございます。」

「おはよー、緑野くん。」

「おはよう。」

美穂、愛子、久保が返す。

「あ、おはよう、緑野くん。」

優子も遅れて返す。

「今日は俺より早かったんだな。」

「昨日がいつもより遅かっただけ。いつもこのぐらいよ。」

昨日自分より遅く来ていたため、いつも自分より遅く来ていると思っ
た魁人が聞くが、優子は昨日が特別遅かっただけだと言う。

「昨日でFクラスとBクラスの決着がつかなかったらしいから、
今日も自習だろうな…。」

「2年に上がってからまともに授業してないよね…。」

魁人がいうと愛子が苦笑いで返す。

「まあ、楽だからいい」木下 優子はいるっ?!「…なんだ?」

魁人が楽だからいいと言おうとすると、急にドアが開き、誰かが
叫びながら入ってくる。

「木下 優子…私達を豚呼ばわりして…許せないわ!!」

「はあ? 話が見えないんだが?」

「君はCクラス代表の小山さんかい?木下さんは朝からずっと僕
らと一緒に居たが?」

Cクラスの代表「小山 友香」は優子に怒りを込めた視線を送り、
「そんなこと言っても騙されない！！私達Cクラスは、Aクラス
に宣戦布告するわ！！」

と、Aクラスに試召戦争をしかける。

「ああ、ついにきたね。本来こっちはなんのメリットもな
いけど…。」

「……下位クラスからの宣戦布告は拒否できない。」

いつの間にか翔子も来ており、試召戦争のルールによって回避で
きないと話す。

「…ちっ、雄二め…。こっいつことか…。」

「え、どういつこと?」

「なあに、誰の差し金か分かったってだけの話だ。」

魁人は面倒くさそうに話す。

「でも、今はFとBが戦っていますから、私達は開戦できません
よね?」

「FとBの決着がいたらもう一度来るわ…。首を洗って待つて
なさい!」

美穂の疑問に友香はそう答えると、ドアを思い切り閉め、帰っていった。

「…しかし、優子にすごい敵意むき出しにしてたね。」

「……。」

優子はそう言うと、優子は身に覚えがないため、戸惑っているよう。

「…気にするな。木下さんが何かやったわけじゃないんだろう？」

「う、うん。」

「なら、気にすることはない。こっちは何もしていないんだからな。変な心配はするな。」

「…ありがとう。」

魁人は優子を励まし、頭にぼんぼん、と手をのせると、優子は恥ずかしそうにお礼を言った。

「…天然、鈍感だからこそできることだよねえ。」

「…それにも程があると思うけどね。」

優子と久保はいつもどおり苦笑いする。

「……。」

そして、やはり美穂は複雑は顔をしている。

「さて、宣戦布告されたんだ、こっちも用意しなきゃな。」

「え？でも…。」

「……あっちがいつ終わるかわからない。」

魁人が言うと、愛子と翔子が疑問をかえす。

「遅くとも午前中には終わる。絶対にな。」

「…ちなみに、緑野くんはどっちが勝つと思ってるんだい？」

魁人は断言すると、久保が勝敗の予想を聞く。

「F。そもそも、屑が代表をやっているクラスに雄二達のクラスが負けるはずがない。」

「随分信頼してるのね…。」

魁人はBクラス代表「根本 恭二」が心底気に入らないらしく、屑呼ばわりする。

「それで、霧島さん。頼みがあるんだが…。」

「……何？」

魁人は代表である翔子に頼みがあるという。

「今回の戦争の指揮、俺に任せてくれないか？」

真面目な顔で翔子に指揮権をくれ、という。

「……別に、構わない。代表の私は動けないから、それが妥当だ
と思う。」

「ありがとう。じゃあ、早速、策の説明をするか……。」

魁人は策の説明をしたいようだが、まだ生徒は揃っていない。

「……朝のHRのときだな。そこが一番いいだろ。」

「……そうですね。皆集まっていますし、宣戦布告のこともそのとき
話しましょう。」

魁人の言葉に、美穂は賛同する。

「しっかりやってね？ 緑野くんがしっかりしないと、クラスが負
けるんだから。」

「分かってる。やるべきときには、ちゃんとやるぞ。」

魁人は珍しくかなり真面目な表情でそう答える。

「頼んだよ。」

「頼りにしてるからね。」

「……じゃあ、私達は席に戻る。」

その顔を見て安心したのか、皆は安堵した顔で席に戻っていく。

「…さて、期待と、クラスの命運を背負ってるんだ。真面目にやんなきゃな。」

そう言うと、魁人は自分の席のパソコンに向かう…。

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？（後書き）

コメントを頂きました！

紫苑さん、毎回ありがとうございます！

朝の出来事だけで1話終わらせてしまった…。

次は魁人の策が披露されます！

面倒くさがりの真価やいかに？w

次回も読んでいただけると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第8話 策士としての才能、開花？（前書き）

テストからの逃避、継続中W

第8話 策士としての才能、開花？

「さて、でかい声だったから知っているやつもいるかもしれないが、俺達AクラスはCクラスに宣戦布告された。」

ガヤガヤ…

「いつか来るとは思っていたが…。」

「ああ、こんなに早く来るとは…。」

「でも、今はFとBがやってるから試召戦争は無理なんじゃないの？」

あまり知っている人がいなかったらしく、教室内はざわめく。

「…さて、一回静かにしてくれ。」

頃合をみて、魁人は場を鎮める。

ちなみに、普通は代表が前に立つものだが、代表が

「……私はそういうの苦手。緑野がやって。」

ということ、魁人が前で話している。

まあ、一応翔子も前に居るが。

「…指揮権についてはさすがに代表が言った方がいいだろ。」

「……分かった。」

代表から直接指揮権については話してもらったほうがいい、と考
えた魁人は、翔子にそう促す。

「……今回の試召戦争では、学年次席の緑野に指揮をとってもら
う。皆、緑野の指示を聞くように。」

ザワザワ…

「なんであいつ…?」

「でも、次席らしいよ?」

「代表も確かにそういうことは苦手そうだけど…。」

魁人の指示を聞くことに抵抗のある人が多いらしく、また教室は
ざわめく。

「ほら、ちゃんと緑野くんの言うこと聞いて!」

今度は優子が鎮める。

「ありがとう、木下さん。」

「いや、いいわよ。それより、話の続きを。」

「ああ。今回はとりあえず俺の指示に従ってもらいたい。今回そ
れで失敗したり、気に入らない策だったりしたら、次からは他のや

つに指揮をしてもらおう。それでいいか？」

「そうだな、今回はいいんじゃないか？」

「お手並み拝見ってところだね。」

他のクラスメートも納得してくれたようである。

「ありがとう。それじゃあ、今回の策を説明する……………」

「…以上だ。何か問題点、質問などあるやつはいるか？」

最後に問うが、誰も手をあげない。

「じゃあ、この策でいこうと思う。皆協力をよろしく頼む。」

『お〜！！！』

基本、ノリがいい人達みたいである。

「はあ、緊張した。」

「全然、そうは見えなかったけど。あーいうの、合ってるんじゃない？」

「確かにね。立派だったよ。」

魁人が席に戻ると、いつもの4人が近付いてきた。

「そうですね。堂々としてて、かつこよかったです。」

「そうだね。」

「ありがとう。」

それぞれが魁人を褒め、本人も満更じゃない様子である。

「でも、大丈夫なのかい？あの策だと、緑野くんが大変すぎると思うんだが。」

久保がさっきの策について聞く。

「これぐらいやないと皆ちゃんとしてきてくれないしな。それに、それほど大変じゃないさ。1人じゃないしな。」

「ま、そりゃそうだね。緑野くんならなんとかかなりそうだし。」

「だが、俺が成功させるには皆の協力が必要不可欠なのはさつきも言った通りだ。お前らが少しミスると俺達が危険になる。背中はそのんだぜ？」

「ああ、わかってるさ。」

「任せて!!」

久保と愛子はやる気が全面に出ている。

まあ、クラスメートは全員やる気だが。

「美穂と木下さんも、よろしくな。」

「もちろん、やれるだけはやるわ。」

「頑張ります!!」

優子と美穂も気合を入れている。

「まあ、開戦はおそらく昼の後だ。こんなに早く気合を入れて、開戦時になくなっちゃわないようにな。ペース配分を考慮しろよ。」

「…流石にそんな馬鹿なこととはしないよ。」

魁人の忠告に愛子は苦笑いする。

「じゃあ、俺は寝て、体調を整えるか…。」

「試召戦争前だっていつてるのに、よく寝れるわね…。」

魁人は優子が言い終わる頃には、もう寝息を立てていた。

第8話 策士としての才能、開花？（後書き）

うーん、やっぱり文字数少ないかな？

今回魁人が話したところは、A対Cが終わったら書きます。

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！

「さあ、開戦5分前だ…。皆、策は覚えているな？」

『もちろん！』

「俺達の背中は諸君らに任せたぞ！」

『任せとけ！！』

最高にノリのいい皆さんでした。

Aクラスのイメージはどこへやら…。

「緊張しますね…。」

「そうね…。でも、多分これからこういうことも増えるはずだから、慣れないと…。」

「ボクは少し楽しみかな。」

「本格的に召喚獣を動かす機会は少なかったからね。僕も楽しみだよ。」

美穂、優子、愛子、久保といういつものメンバーが魁人のまわりに集まっていた。

「さて、俺達はそろそろ準備しておくぞ。」

「「そうね（そうですね）…。」」

「頼んだよ。勝敗は君らにかかっているんだからね。」

「分かってるさ。そっちもしっかりやってくれよ？」

そう言うと、魁人、美穂、優子の3人は広い教室のどこかへ消えていった…。

「3…2…1…。」

『開戦だ！』

遂に開戦の時間になった。

しかし、Aクラスのメンバーは動かない。

「さあ、何人でくるか…。」

「全員だったらすぐに終わるんだけどね。」

久保と愛子も動かさず話をしている。

『Aクラスを潰せええ!!』

『俺達を罵倒したAクラスを許すなああ!!』

そこへCクラスが突撃してきた。

「来たよ!」

「よし、クラスのほぼ全員がいる…。今だ!男子、動くぞ!」

男子の指揮権を預かった久保が指示を出す。

すると、男子は2つに別れ、翔子を守るのは横1列になった女子だけとなった。

『どういうことだ?!』

『かまわん!そのまま女子を突き破れ!』

頭に血がのぼり、冷静な判断ができないCクラスは、かまわずそのまま突っ込む。

「男子!作戦どおり後ろからたたくぞ!策を忘れず、冷静に戦え!」

『おお!』

すると、2つに分かれていた男子が、Cクラスの後ろで1つになった。

「1人も逃がすなよ！」

久保は普段からは想像できない声で指示を出す。

『かこまれたぞ?!』

『前は女子しかないんだ!このまま突き進むぞ!』

「皆、ここが耐えどころだよ!焦らず、冷静に対処して!」

今度は女子の指揮権を預かった愛子が指示を出す。

「緑野くんが言ったことを忘れずないで!1対1なら負けないよ!」

魁人の策を忠実に守り、Cクラスを包囲していく。

「よし...、ここまででは緑野くんの作戦どおりだね...。」

愛子は安堵の息をつく。

「男子、策が成功したからって、油断するな!」

しかし久保は気をゆるめることなく指示を出す。

「おっと、ここで落ち着いちゃ、駄目だね...。」

愛子も気を引き締めなおす。

「女子もだよ!ボク達が崩れたらAクラスが危ないんだからね!」

「勝つのは、絶対僕達Aクラスだ（よ）！！」

愛子と久保の声が重なる。

その声に応えるように、Aクラスは歓声をあげる。

「…あつちは上手くやってくれたみたいだな…。」

「そうですね。こつちもそれに応えないと…。」

「あんまりゆっくりやってると、あつちが危なくなるから、早くいきましょ？」

「ああ、そうだな。」

魁人、美穂、優子の3人は高橋先生を連れ、Cクラスへ向かっていった。

男子が2つに分かれた時、それにまぎれて教室を出ていたのだ。

「ここか、Cクラス…。」

元々場所が近いので、すぐについた。

ガラッ！！

「高橋先生、数学のフィールドをお願いします！俺達3人がCクラス6人に数学勝負を挑みます！！」

「承認します！」

「え?!」

「『試験召喚獣、試獣^{サモ}召喚!!』」

CクラスはAクラスが来ることを予想していなかったのか、代表の友香と、生徒5人しかいなかった。

そして3人の点数が表示される。

数学

Aクラス

緑野魁人&木下優子&佐藤美穂

867点&377点&343点

「へえ、2人もけっこうできてるんだな。」

「緑野くんに言われてもね…。」

「私達の点数をたしても、魁人くんに届きませんし…。」

魁人は得意の数学のため、異常な点数をとっている。

「さあ、早く召喚してくれよ。それとも、降参か？」

「くつ、調子に乗るんじゃないわよ！試獣^{サモ}召喚！」

数学

Cクラス

小山友香&その他5人

188点&150ぐらい×5

『俺達の扱いひどくない?!』

いや、だってモブだし。

『orz』

「じゃあ、行くぜ！」

魁人は高得点のため、瞬間移動にも近い速さで接近していく。

魁人の召喚獣は剣道の胴着袴に竹刀をもっている。

「まず2人！」

そう言うと、一瞬で2人の両脇腹を1回ずつ打ち、消滅させる。

『な?!』

「美穂、木下さん、そっちの2人は任せた！」

そう言いながら、魁人は相手の喉元に突きをくравせ、相手がよろめいたところに剣道でいう「面」をきれいに決め、友香の召喚獣に接近していく。

「…このままだとアタシ達が倒す前に終わりそうね。」

「そうですね…。」

そんなことを言っている間に魁人は友香の召喚獣を一瞬で切り捨て、勝負をつける。

「ん?なんだ、お前ら戦わなかったのか？」

「緑野くんが終わらせるのが早すぎるのよ…。」

優子は呆れて言う。

「勝者、Aクラス！」

こうして、Aクラスの初戦争は30分もたたずに終戦を迎えた。

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！（後書き）

設定には書かなかったんですが、魁人は召喚獣での戦いに興味をもっていたので、明久が手伝いをしているときに一緒に召喚したりしていたので、扱いには慣れていきます。

なので、操作技術は明久に引けをとりません。

気が向いたらその内主人公紹介に更新しておきます。（すぐやれよ）

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。(前書き)

今回は第8話のときの策の説明をしようと思ったんですが、一応戦後対談を形だけでも終わらせようと思ったのでこっちを先にしました。

では、どうぞ。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。

「あ、おかえり!」

Cクラスから帰ってきた魁人に愛子は声をかける。

「ただいま。こっちはどうだった?」

「策が出来すぎなくらい上手くいったね。こっちの戦死者は0だった。」

今度は久保が返す。

「あつちも5人しかいなかったからな。良い練習になったか?」

「まあまあだね。ちょっとはなったかな。」

愛子も久保もそれなりにはできたらしい。

「そろそろ戦後対談を始めてください。」

担任の高橋先生が声をかける。

「霧島さん、呼んでるぜ。」

「……緑野、行って来て。」

「はあ?」

「そうだね、今回の試召戦争でのトップはある意味緑野くんだ。それが筋だろう。」

「…マジかよ…。面倒くせえ…。」

魁人が行く流れになってしまい、魁人は渋々行くことになった。

「悪いが、木下さんついてきてくれるか？」

「別にいいけど…。何で？」

「代表が行かないなら、女子の代表は木下さんだろ。」

「そういうことね…。まあ、いいわよ。」

魁人は男女からそれぞれ1人ずつ代表を出して行く気らしく、翔子を除いた女子でリーダーシップをとれる優子を連れていくことにする。

「じゃあ、行ってくる。まあ、設備を落してもらっただけだな。」

「うん、行ってらっしゃい。」

魁人と優子は再びクラスに向かう。

「…………。」

「…佐藤さん？どうかしたのかい？」

久保は美穂の様子がおかしいのに気づき、声をかける。

「うん…。この問題はボク達でどうにかできる問題じゃないと思うんだよね…。」

愛子は理由に心当たりがあるらしく、少し考える。

「とりあえず、悪いんだけど久保くんは別のところ行ってもらえ
る？男子に聞かれるのもちよっと嫌な話になるかもしれないし…。」

「分かった。じゃ、また後で。」

久保は自分の席に戻っていった。

「さて…。美穂ちゃん。多分、緑野くんのことでしょ？」

「…はい…。」

「話してごらん？ボクで力になれば、手助けするよ。」

「ありがとうございます…。」

美穂は愛子に向き直ると話し始める。

「…この頃、魁人くんが急に木下さんと仲良くなっちゃって…。
怖いんです。いつか私の近くからいなくなってしまっくんじゃないか
って…。もちろん、私と魁人くんが付き合っているわけじゃないの
で、そんなわがママを言うことは許されないのかもしれないが…。
それでも、私は魁人くんと、出来るだけ、長く一緒にいたいんです
…。」

美穂は途中から涙を浮かべながら話す。

「そっか…。きつと、寂しいんだね…。」

「寂しい…。そうなのかもしれない…。私は、魁くんがどんどん遠くへ行っちゃうのが、寂しいのかもしれない…。」

美穂は本当に悲しそうな顔で話している。

「…でも、ボクはこのままじゃ、絶対ダメだと思うな。」

「…どういことですか？」

「ずっと一緒にいたいっていうけど、優子がいるから潔く身を引く？それじゃ、ダメだよ。優子には絶対渡さない、自分のものにしてみせる！って気持ちでいなきゃ。もっと、積極的にならないと。」

優子は自分の考えを美穂にぶつける。

「ボクが言えることはこれぐらいかな…。後は、美穂ちゃんが自分で考えることだよ。」

「はい…。ありがとうございます、工藤さん…。」

「優子でいいよ。」

「…優子さん、ありがとうございます…。私、頑張りますね…。」

美穂は、笑ってそういう。

「その意気だよ！応援してるから！頑張ってる！」

愛子はそういって席へ戻っていく。

「…そうですね…。もっと、積極的に…、ならないと…。木下さんには、絶対、負けません…！」

静かに決意を固めた美穂だった。

「戻ってきたぞ。」

それから少しして、魁人が戻ってきた。

「あ、魁人くん、おかえりなさい！」

美穂は魁人を見つけると、その声をかけてくる。

「まったく、ダメじゃない緑野くん。こんなかわいい娘を泣かせちゃあ。」

愛子が茶化すように言う。

「はあ？どういことだ？」

「ちよつと、愛子さん？！／＼／」

魁人は意味が分からない、というように首をかしげ、美穂は顔を赤くする。

「あはは、冗談だって。じゃあ、また明日ね。」

もう下校の時間らしく、愛子は帰っていく。

「魁人くん、今日も一緒に帰りましょう！」

「ん？…別にいいが…、何をそんなに焦ってるんだ？」

「いいですから！早くいきましよう！」

「おい、ちよつと待てつて…。じゃあな、木下さん。」

「え、ええ…。」

美穂は魁人を引つ張つて教室から出て行く。

「…やれやれ、これから大変になりそうだね…。」

その様子を久保は遠くの席から見ていた…。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。(後書き)

…なんかおかしいよおお？！

はあ、この頃上手く話が書けないなあ…。

だれか、アドバイスを恵んで下さい…。(泣

そして愛子の美穂に対する呼び方が分からない！

なんかどんどんおかしくなってる気がする。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10 / 5話 策って結局何だったの？（前書き）

今回は第8話の策の説明のところの話です。

ただの振り返りの感じですませる予定なので、流しても大丈夫だ
と思います。

では、ごうぞー！

第10 / 5話 策って結局何だったの？

「さあ、策の説明を始めるぞ。」

Aクラスの全員が魁人のいうことに耳をかたむける。

「まず、向こうの動きだ。おそらくあの様子だと、何も考えず全員で突っ込んでくるだけだ。何も怖くない。」

「確かに、すごい怒りようだったわね…。」

「優子からしたらとんだとばっちりだったよね。」

優子は少し引き気味に話し、愛子は苦笑いする。

「戦う場所だが、この広い教室を利用しようと思う。」

「この教室を、かい？」

ここで戦う、という魁人の言葉に、久保は聞き返す。

「そうだ。俺の策も、その方がやりやすいしな。」

魁人はその方が都合がいいと言う。

「まず、俺達は部隊を3つに分けることにする。まず1つ目はその相手の突撃を抑える部隊。これは女子全員に任せる。このクラスは女子の方が多いからな。」

「わかったわ。」

女子から代表して優子が返事をする。

代表はそんなに戦うわけにはいけないのでこの部隊に入らないことをわかっているからだ。

「次に2つ目の部隊。抑えた相手を後ろから攻め立てる部隊。これは男子に任せる。」

「なるほど。だが、後ろをとるのは難しくないかい？この教室で戦うんだらう？」

久保は魁人の策に疑問をもち、質問する。

「いや、そこまで難しくはない。さつきも言ったが、相手はただ突っ込んでくるだけだ。相手が突っ込んできたところを左右二手に分かれて通してやれば、簡単に後ろをとれる。信じられないかもしれないが、本番になったら分かるさ。」

「わかった。」

男子からはさつきまでと同じ久保が返事をする。

「そして最後の部隊。男子と女子がCクラスを抑えている間に、Cクラス本陣へ奇襲をかける部隊だ。これには俺が参加する。」

「1人で奇襲をかけるんですか？危険だと思いますが…。」

今度は美穂が質問を投げかける。

「もちろん、そんな無謀な真似はしない。この部隊には霧島さんを除いたメンバーでの数学トップ3が入る。高橋先生、誰か調べてくれますか？」

「分かりました。少し待って下さい。」

魁人が奇襲をかけるのは3人だと言い、高橋先生にその選抜に選ばれる人を調べてくれ、と言う。

「…出ました。緑野くん、木下さん、佐藤さんですね。」

「ありがとうございます。さっきの3人…俺、木下さん、美穂の3人で奇襲をかける。そのために、男子は絶対に後ろにCクラスをやつを通さないでほしい。」

「分かった。任せてくれ。」

また久保が返事をする。

「今回の戦いは召喚獣の操作に慣れるため、つまり操作の練習だと思ってくれ！無理に相手を撃破する必要はない。1対1なら負けることはないから、必ず1対1に持ち込んでくれ！」

『了解！』

「男子の指揮は久保くん、女子の指揮は工藤さんに任せる。2人はその場その場に応じて、指示を出してくれ。」

「「わかった(よ)。」」

「おそろく、開戦は昼過ぎになると思う。それまでに自分がやるべきことをしっかり理解してくれ。以上だ。」

そう言っつて魁人は席に戻った。

ほとんど何も話さなかつた翔子も、魁人の話が終わると席に戻つていった…。

第10 / 5話 策って結局何だったの？（後書き）

こんな感じで説明していました。

特に説明する必要もないかな？と思ったので、こういつ番外編みたいな感じで説明しました。

次回からは遂にA対Fの話に入っていく…はず。

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第11話 優子の心配事、実現間近？

「あ、魁人くん！」

たぐだぐいゝまゝ登校中。

「ん？美穂か。」

「おはようございます。」

「ん、おはよう。なんか、今日は機嫌がいいな？」

「はい、今日は朝から魁人くんに会えましたから。」

「ん？どういうことだ？」

「な、なんでもないです！」

美穂は言って恥ずかしくなったのかごまかした。

「おはよう。」

「おはようございます。」

魁人と美穂は2人で教室に入る。

「お、朝から2人で登校？熱いねえ〜w」

愛子がいきなり茶化す。

「そ、そんなんじゃないですよ／＼」

「…あいさつも返さずいきなり茶化されるとはな…。」

美穂は顔を赤くし、魁人はため息をつく。

「あ、緑野くん、おはよう！」

「ん、木下さんか。おはよう。」

優子はきちんとあいさつをする。

「ん、久保くんはどうした？」

「さっきまでいたけどね。トイレじゃない？」

久保がいないことに気づき、魁人は問う。

「皆、Aクラスにお客さんだよ。」

するとその久保が戻ってきた。

∴ Fクラスをつれて。

「やっぱり来たか、雄二。」

「ああ、やっとここまで来たぜ。」

「待ちくたびれたぜ…。歓迎するよ。」

魁人はFクラスとの勝負を楽しみにしていたらしく、笑っている。

「さて、今日は宣戦布告しに来たわけだが…。ちょっと交渉をしたい。」

「まあ、立ち話もなんだから、こっち座れよ。」

「ん、すまないな。」

魁人は雄二達Fクラスを席に案内する。

ちなみにFクラスから来たのは雄二、明久、康太、姫路の4人である。

「で、交渉つてのは何だ？」

今回、交渉のテーブルについているのは魁人、補佐として近くに優子がいる。

「ああ。勝負を一騎打ちにしたい。」

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

雄二は基本のクラス同士の対決ではなく、代表同士の一騎打ちで勝敗をつけたい、という。

「却下だな。俺達にはわざわざリスクを犯す必要がない。」

「賢明だな。」

魁人はすぐに却下し、雄二は予想していたのか構わず続ける。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「ああ、お前らのせいで起きたやつのことか？」

「ちょっと、それどういうこと?」

雄二はCクラスとの試召戦争について聞くと、魁人はその元凶である雄二を睨み言うが、優子は話についていけないようで、魁人に聞く。

「簡単なことだ。あのCクラスとの戦いは雄二に仕組まれたことだっただけのことだ。」

「やっぱり気づいてたか…。」

「当たり前だ。」

「…そういうことね…。」

魁人はあの戦いは雄二が仕組んだこと、と言うと優子は納得してうなづく。

「さて、ここで1つ雄二にしてもらわなければならないことがある。」

「なんだ?」

魁人は雄二がすべきことがある、と言う。

「決まってるだろ?…木下さんに謝れ。」

「は?」

「は？、じゃねえだろ。木下さんはそのせいでとんだ濡れ衣をかけられたんだ。そのぐらいして、当然だろ？」

魁人は優子に謝れ、といつもとは違うとても真剣な眼差しで雄二に言う。

「…そうだな。すまなかったな、木下姉。変な濡れ衣をきせて…。」

「

雄二は、魁人がこの眼をしたときは決して意見を覆さないことを知っているので、真面目に優子に謝る。

「ま、本人は肅清したし…。別にいいわよ。」

「…朝あいつがボロボロだったのは、そういうわけか…。」

優子はそうなった原因を肅清した、ということ、雄二は少し顔を青ざめさせる。

「さて、本題に戻るぞ。簡潔に言つと、Cクラスはまるで相手にならなかった。お前も知っているんだろ？」

「ああ…。まさか、30分で終わらせるとは思わなかった。」

魁人はCクラスなんて相手にならなかった、ということそのことを雄二も知っていたようで苦笑いを浮かべる。

「Bクラスを使って脅すつもりかもしれないが…。俺にはその手は通用しない。Cと同じように、瞬殺してやるぞ。」

魁人は雄二の考えを読んでいるようで、それは通用しない、という。

「そもそも、こんな策が俺に通用すると思ったのか？」

「いや、交渉相手は木下姉だと思っていた…。お前は面倒くさがって出ないだろうと思ってな。」

雄二は魁人に通用する策だとは思っていなかったようで、魁人以外に使うつもりだったと言う。

「あてが外れたな。だが、条件次第では飲んでやってもいいんだぞ？」

そこに魁人は少し助け舟を出す。

Fクラスとの勝負をそんな簡単につけたくないからだ。

「そうだな…。なら、5対5の代表戦ならどうだ？」

「そうだな…。別にかまわない。教科選択権は俺らが2、お前らが3ってところか？」

「ま、妥当なところだろ。交渉成り…」

「……ちょっと待って。」

「うわっ！」

話し合いを終わりにしようと思ったら、翔子が話に入ってきた。

「なんで、そんなに驚いてるんだ？明久。」

「だって、急に……。」

明久は急に出てきた翔子に驚いたようだ。

「……1つ、条件をつける……。」

「ん、何だ？」

ここで翔子は1度姫路のほうを見る。

「……負けたほうは、なんでも1つ言うことを聞く。」

「……なぜお前らはそんなに挙動不審になる？」

康太はカメラの手入れを始め、明久はなぜかオドオドしている。

「だ、だって、もし負けたら姫路さんが……」

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

明久はさっきの翔子の行動から何か考えたらしく、姫路の了承がない、と言う。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

雄二は勝つ自信があるらしく、自信たっぷりと言う。

「時間はどうする？」

「そうだな。10時からでもいいか？」

「わかった。じゃ、また後でな。」

「ああ。」

魁人と雄二で時間を決めると、Fクラスは戻っていった。

「さて、交渉も終わりだ。席に戻るぞ……。って、木下さん？どうした？」

後半ほとんど話に入ってこなかった優子は何か考えていたらしく、魁人が声をかけても返事をしない。

「どうした木下さん？体調でも悪いのか？」

そう言って魁人は優子に顔を近づける。

「はっ?! な、何でもないわよ?! / / /」

優子は気がつくくと、魁人の顔が近くにあってため、顔を赤くする。

「そうか。じゃあ、俺は席に戻るな。」

そう言って魁人は席に戻っていった。

(Fクラスと、ってことはもちろん秀吉も来る……。 緑野くんは…。
緑野くんなら、絶対に大丈夫…！でも、もし…。)

優子はまだあの事が不安らしく、浮かない顔をしていた…。

第11話 優子の心配事、実現間近？（後書き）

うーん、美穂と優子の魁人との絡みに差がありすぎるかな？

なんか優子との話ばかり書いてる気がする…。

次はやっとA対Fです。一体どうなるか、魁人は優子の不安を晴らせるのか、

お楽しみに！

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第12話 A対F！最下層からの挑戦！〜前半〜（前書き）

やっとAクラス対Fクラスに入れました…。

では、どしどし。

第12話 A対F！最下層からの挑戦！〜前半〜

「では、両名共準備は良いですか？」

今回は一騎打ちの形で行うため、立会いは全教科のフィールドを展開できるAクラスの担任、高橋先生だ。

「ああ。」

「……問題ない。」

もちろん今回の会場はAクラス。

両代表が、準備完了を伝える。

「それでは、1人目の方、どうぞ。」

「……（スック）」

Fクラスでは康太が立ち上がる。

「初めから康太か……。」

魁人は康太の成績を知っているため、少し顔を歪める。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは、愛子が立ち上がる。

「1年の終わりの転入してきた、工藤 愛子です。よろしくね。」

愛子はFクラスに自己紹介する。

「教科は何にしますか？」

「……保健体育。」

康太は自己の唯一にして最強の剣、「保健体育」を選択する。

「土屋くんだけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子も絶対的な自信をもっているらしく、臆せず言う。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミと違って、「実技」で、ね。」

問題発言。

「…工藤さん。女子がそういうことを言うのはあまり…。」

魁人は苦笑いする。

「そっちのキミ、吉井くんだけ？勉強苦手らしいし、保健体育でよければボクが教えてあげようか？もちろん、「実技」で。」

愛子は明久を指名して、挑発(?)する。

「フッ。望むところ…。」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要なありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが。」

「…明久。生きてれば、その内良いこと、あるって…。」

明久は今にも死にそうなくらい、悲しい顔をしていた。

「そろそろ召喚を開始して下さい。」

「…工藤さん。油断するなよ。」

「大丈夫だって。試獣召喚サモンつと。」

「……………試獣召喚。」

魁人は愛子に警告するが、愛子はそのまま召喚する。

「なんだ、あの巨大な斧は?!」

愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧というミスマッチな召喚獣を召喚していた。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

そう言つと、愛子は（おそらく）腕輪の力で斧に雷光を纏わせ、異常な速さで康太の召喚獣に接近する。

「これならいけるな。」

「ああ、まずは1勝だ。」

その様子を見て、Aクラスの面々は勝利を確信する。

ちなみに点数はシステムの不調か、まだ出ていなかった。

その中で魁人は、

「…負けたな。」

と、1人呟いていた。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん。」

そう言つと、愛子は康太を一刀両断にしようと、斧を振り下ろす。

「ムッツリーニッ！」

明久もその様子に不安を覚えたか、声をあげる。

だが、次の瞬間、

「……加速。」

康太がそう呟くと、康太の召喚獣は姿を消し、

「え？」

「……加速、終了。」

もう一度康太が呟くと、愛子の召喚獣は血を噴出し、消滅した。

そして、遅れて点数が表示される。

保健体育

Aクラス Fクラス

工藤愛子VS土屋康太

446点 572点

康太の勝利が確定する。

向こうの明久も驚いているようで、雄二が明久に何か言っている。

「そ、そんな…！この、ボクが…！」

愛子はかなり悔しがり、床に膝をつく。

「…だから言っただろ。油断すんなって。ま、ある意味自業自得だよな。」

「ちょ、ちょっと?!それは言いすぎじゃない?!」

そんな愛子に、魁人は厳しい言葉をかけ、優子はそれを咎める。

「…いや、悪いのは、ボクだから…。仕方ないよ…。」

愛子はショックを引きずり、クラスメートの中へ消えていった。

「…いくらなんでも、言い過ぎよ。」

「いや、あれくらいでちょうど良い…。愛子はAクラスの大事な戦力なんだ。いざつて時、油断と自信の違いも分からないようじゃ困るからな。それに…。」

魁人は1度言葉を切る。

「…工藤さんはあれくらいじゃへこたれない。今までの付き合いで、そのぐらいのことは分かるさ。」

魁人もちゃんと愛子のことと考えているようで、厳しい言葉をかけた理由を微笑みながら話す。

「…でも、流石に厳しいんじゃない？一応、謝っておきなさいよ？」

「…俺から言う気はない。意味が無くなるからな。」

優子は一応謝れと言うが、魁人はそれでは意味が無い、と言う。

「では、次の方、どうぞ。」

2回戦が始まる。

「さて、俺が行くか。」

Aクラスからは魁人が出るようだ。

「よし、頼んだぞ、明久。」

「え、僕?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「へえ、明久とか…。おもしろいな。」

「言って来い、明久。俺は信じてる。」

魁人は笑うと、雄二は自信たっぷりと言う。

「へえ…。僕に本気を出さ「御託はいい。とっととやろっぜ。まだ言い終わってないのに?!」」

魁人は明久の言葉を遮り、始めようと言う。

「教科選択権は貰っぜ。先生、俺とこいつで別の教科で対戦って出来ますか?」

「設定を変える必要があるので時間はかかりますが…。出来ないことは無いですね。」

「分かりました。では…。」

魁人は自分と明久で別々の教科を使いたいらしく、先生に聞き、どっちが何の教科を使うか言う。

「…俺が数学、明久が総合科目でお願いします。」

「…分かりました。では、少し待って下さい。」

先生にそう言うと、高橋先生は作業を始める。

「ちょ、ちょっと、大丈夫なの?!」

「ああ、俺は工藤さんと違って油断なんてしていない。ちゃんと考えてこうしてるんだ。心配するな。」

優子は心配そうに聞くが、魁人は心配はいらない、と返す。

「いいの？魁人くん。」

「ああ、お前じゃ総合科目でもたかが知れてるしな。こうでもないとおつまらない。それと、俺はお前を呼び捨てで呼んでるんだ。お前も「くん」なんかつけるな。……気持ち悪い。」

「今、僕を馬鹿にした上、罵倒しなかった?!」

「お、分かったか。進歩したな。」

「僕だってそれぐらいストレートに言われれば分かるよ?!」

魁人は明久を馬鹿にし、明久はそこまで馬鹿じゃないと言う。

「ま、でも、後悔しないでね？魁人。」

「後悔なんてするはずないだろ？勝つのは俺なんだからな。」

魁人は絶対的な「自信」を持っているようで、明久にそう言う。

「用意が出来ました。では、始めてください。」

「「^{サモン}試獣召喚！」」

2人同時に召喚獣を出す。

今回はすぐに点数が出る。

数学&総合教科

Aクラス Fクラス

緑野魁人VS吉井明久

847点 594点

「…ここまで差があるとはな。」

「僕をそんな蔑む目で見るのはやめて?!」

点数を見ると、A、Fクラス共に明久に蔑みの眼差しを向ける。

「さあ、行くぞ！」

まずは魁人が明久（ここからは「召喚獣」という表記はとばします）に向けて超スピードで接近する。

「そらっ！」

そして、明久の喉に鋭い突きを打つ。

「甘いよ！」

明久はそれを器用に流し、頭を殴ろうとする。

「…かかったな。」

「えっ?!」

その瞬間、流したはずの魁人の竹刀が明久の頭上に降ってくる。

「くっ?!…あれ？」

咄嗟に明久は木刀で防ごうとするが、竹刀はすり抜け、明久にも当たらず、そのまま消えた。

「そこだ！」

「しまった?!…ぐあっ！」

その隙に魁人は明久の頭に面を打ちそのまま下がっていった。

「…武器の幻影を創り出す能力か？」

雄二が自分の予想で腕輪の能力を話す。

すると、

『完璧に面ありだ…。綺麗に引き面が入ったな。』

Fクラスの方からこんな声がする。

「…？ お、お前は須川？！ この学園だったのか？！」

「久しぶりだな、緑野。」

声の主、「須川 亮」は前に出てきて、魁人に言う。

「召喚獣でも剣道の動きを活用できるとはな。しかも、突きは高校からだつてのに。」

「お前でも出来るだろ。お前の方が現役時代は強かったんだからな。」

「え〜つと、僕は無視？」

2人で話していると、フィードバックから復活した明久が声をかける。

「おつと。悪いな。じゃ、須川、後でな。」

「あぁ。」

そう言つと須川はFクラスの中に消えていった。

「しかし、お前も馬鹿だな。さっき攻撃しちまえば良かったものを。」

「……。ぼ、僕はそんな卑怯な真似h「言い訳するな。」「……。」

明久はまた言葉を遮られ、いじける。

「そんなことしてる暇あるのか？行くぞ！」

魁人はそう言つて明久にまた近付いていく。

「くっ！」

明久は迎え撃つ姿勢をとる。

「……終わりだ。」

「え？……いつたあ?!」

数学&総合教科

Aクラス

Fクラス

緑野魁人

VS

吉井明久

807点

0点

「勝者、Aクラス。」

高橋先生の声が響く。

フィールドには、さっきまで前から明久に迫っていった魁人が明久の裏にいた。

「え？え？ どういうこと？」

「誰が幻影を創れるのは武器だけと言った？」

「…そういうことか。」

明久はまだ何があったか理解していないようで、魁人が幻影を創れるのは武器だけじゃない、と言う。

「つまり、お前は自分の幻影を明久に突っ込ませ、その隙に後ろから攻撃したってことか。」

「ああ。俺の『幻影』ミミラージュは俺、もしくは俺が触れているものの幻影を創りだせる。」

雄二は魁人がやったことを理解し、魁人は自分の腕輪の能力を説明する。

「…終わってみれば、やっぱり緑野くんの圧勝だったわね…。」

「相手がFクラスとはいえ、単教科で総合教科に挑んで圧勝って凄いですね…。」

Aクラスでは、魁人の余裕の圧勝に、優子と美穂が苦笑いしている。

第12話 A対F！最下層からの挑戦！〜前半〜（後書き）

流石に一気に全部は無理なので、前後半に分けました。

魁人の腕輪の能力は『幻影』^{ミラージュ}でした。

1巻の内容は多分、あと多くて3話ぐらいで終わると思います。

今回は、A対F後半です！

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第13話 A対F!最下層からの挑戦!〜後編〜(前書き)

一回消えて、やる気無くしました…。

この頃、1日1話更新の辛さを身にしみて実感しています。

ちゃんと継続できている人の偉大さを改めて実感しました。

第13話 A対F!最下層からの挑戦!〜後編〜

「では、3人目の方、どうぞ。」

「アタシが行くわ。」

Aクラスからは優子が名乗り出る。

「ワシがいこう。」

Fクラスからは、優子の弟「木下 秀吉」が名乗りを上げる。

「…秀吉か。」

「?!」

魁人は秀吉の存在を知っていたらしく、優子はそのことに驚く。

(緑野くんは秀吉のことを知っていたの?…じゃあ、なんでアタシに優しく…。…もしかして、アタシが秀吉に似ているから?)

「木下さん…。木下さん?」

優子は困惑しているらしく、魁人の呼びかけにも気づかない。

「木下さん?大丈夫?」

「え?! だ、大丈夫よ?!」

「…木下さん、この頃何かおかしいぞ？熱でもあるのか？」

そう言うと、魁人は自分の額を優子の額に当てる。

「…熱は無いか。」

優子はやっと何があったか理解し、顔を真っ赤にする。

「ちょ、ちよつと何してんのよ?!」

「ん、熱があるのかと思ってな。ちよつと確かめただけだ。ま、
そんだけ元気なら大丈夫だろ。」

魁人は特に異常は無いと判断し、今回の策についての頼みことを
しようとする。

「今回は、ちよつと無茶なことなんだが…。」

「何？」

「…秀吉に教科の選択をさせ、教科の宣言をさせた上で、戦わず
勝ってきてくれ。」

文字通り無茶な頼みだ。

「…本当に無茶な頼みね…。」

「それは分かってる。だが…、頼む。手段は問わない。」

「…分かったわ。何とかしてみる。」

「…ありがとう。頼んだ。」

魁人も無茶なのはわかっているらしく、頭を下げると、優子は何とかしてみる、と言う。

（緑野くんは、やっぱり秀吉に似ているからアタシのことを心配したり、優しくしてくれたり、するのかな…。）

優子は秀吉のなんらかの劣等感をもっているらしく、そう考えていた。

「さて、教科選択権は秀吉にあげるわ。」

「ありがたい。では古典で頼むのじゃ。」

優子は、まず魁人の指示通り教科を選択させる。

「わかりました。」

すると、古典のフィールドが展開される。

「…ところで秀吉。」

「…頼む？」

「…ちよつと話があるんだけど。こつち、来てくれない？」

満面の笑みで優子は言う。

「し、Cクラスの件は昨日でいいから、来て？」…分かったのじゃ。」

秀吉は震えながら、優子について行き、廊下に出る。

「何をする気は分からんが…。あそこまで怖がってた。何かあんだろ…。」

その時点で、魁人は策の成功を確信し、廊下での話など聞いていなかった。

ガラガラガラ

「秀吉は急に具合が悪くなったから、保健室に行くって。他の人を出してくれる？」

満面の笑み。

「い、いや…。ウチの不戦敗でいい…。」

雄二は優子の笑顔に圧され、不戦敗を認める。

「…フツ…。」

魁人は、誰も気づかないぐらいに笑みを浮かべた。

「あれでよかったの？」

「ああ、上出来だ。助かった、ありがとう。」

魁人は想像以上の出来に、今度は普通に笑みを浮かべる。

「無茶な頼みだったからな。今度、何か奢ってやるよ。」

「え、本当？」

魁人は無茶を聞いてもらったため、礼がしたい、と言う。

「ま、それについては後だ。これが終わってからな。」

「そ、そうね…。」

(もしかして、これってデートのチャンス?!)

優子は浮かれ、先程まで頭を回っていた不安も、少しの間どこかへいった。

「これで2対1です。では、次の方。」

「あ、は、はいっ。私ですっ。」

「それなら僕が相手をしよう。」

Fから姫路、Aから久保が名乗りをあげた。

「久保くん、1つ頼みがある。」

「なんだい？」

「あつちに教科選択権を使わせてくれ。負けても構わない。」

「分かった。」

久保は指示を預かり、対戦の場へと向かった。

「教科選択権はそっちが使っていていいよ、姫路さん。」

「…分かりました。では、総合教科でお願いします。」

「分かりました。では、始めて下さい。」

（…よし、勝った。）

久保が指示を守ったため、Aクラスの勝利を確信し、勝負には興味を示さなかった。

「…すまない。負けてしまったよ。」

「いや、いい。さっきも言ったが、選択権を向こうに使わせてただけでいいんだ。」

久保は負けたらしく、魁人は指示を守ったからいいと言う。

「最後の勝負です。代表の方、どうぞ。」

「……はい。」

「俺の出番だな。」

もちろん、両クラスの代表が出る。

「教科はどうしますか？」

「どうする？霧島さん。」

魁人は当然のように翔子に聞く。

「俺達が教科を決める。」

「何言ってるんだ、雄二。お前らはもう…」

「3回の教科決定権を使い果たしているんだよ。」

「…何？」

「よく考える。まず、始めと4番目で康太、それと姫路さんが使った。」

「ああ。それだけだ。2回だけだろ？」

「…甘いな。秀吉も使ってるんだよ。」

「はあ？秀吉は不戦敗だろ？」

「いや…。嘘だと思っなら、記録を見る。高橋先生、3回戦の結果をお願いします。」

「分かりました。…出ました。」

古典

Aクラス Fクラス

木下優子 VS 木下秀吉

343点 UNKNOWN

「な？教科が古典になっている。なぜなら、秀吉が古典を選び、フィールドを展開した後に棄権したからな。」

「…くっ！」

「まんまと引つかかったな、雄二。お前じゃ頭で俺には勝てねえよ。」

「クソッ！」

魁人はFクラスは既に3回教科を選択している、としてAクラスの教科選択権を行使した。

「では、気を取り直して…。教科は何にしますか？」

「……総合教科。」

雄二がまともな勝負で翔子に勝てるはずもなく、Aクラスの勝利が確定した。

第13話 A対F！最下層からの挑戦！〜後編〜（後書き）

策で上がってきたFクラスを策で落とす。

ちよつと鬼畜です。

次は試召戦争後の出来事です。

今回は1回本文消えるしPC1回壊れるし、大変だった…。

紫苑さん、誤字報告、ありがとうございました！

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。(前書き)

明日実力テストなのに何やってんでしょうかw

では、じゃーん。

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。

「3対2でAクラスの勝利です。」

高橋先生が結果を宣言する。

「……雄二、私の勝ち。」

「クソッ……！」

雄二は策を使うことすら出来なかったことが悔しいのか、唇をかんでいる。

「しょうがないよ。魁人の方が一枚上手だったんだから。」

「ほう。明久でも上手って言葉を知っていたのか？」

「だからそこまで馬鹿じゃないって?!」

明久が雄二を慰めると、魁人はそれを茶化する。

「……ところで、約束。」

「……（カチャカチャカチャ!）」

康太は凄まじい勢いでカメラのセッティングをしている。

「康太、何してんだ?そんなに人の告白シーンを撮りたいのか?」

「は？」

魁人は翔子が何を言おうとしているのか分かるらしく、明久は意味が分からないように首をかしげている。

「わかっている。何でも言え。」

「……それじゃ……」

「……雄二、私と付き合って。」

予想しなかった出来事に、皆固まっている。

動けるのは3人。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

予想できていた相手。

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

告白した本人。

「やっぱりか。なんとなく分かってたけどな。」

そして、それに気づいていた傍観者の3人である。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない。」

「良かったな、雄二。こんなに愛してくれる人、他にはいないぞ？」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあ！放せ！やっぱりこの話はなかったことに……」「いいから行って来い。」「ぐふっ?!」

抵抗する雄二に魁人はボディブローを食らわせ、黙らせる。

「じゃ、霧島さんいつてらっしゃい。楽しんでいい。」

「……ありがとう。緑野はいい人。」

そう言って、翔子は雄二を連れ（ひきずり）、教室を出て行った。

「さて、あとはお願いします、西村先生。いますよね？」

「…なんで分かるんだ？」

魁人は廊下に西村先生がいることが分かっていたようで、呼びかける。

「話はあなたのFクラスでして下さい…。ここだと邪魔なんで。」

「そのことまで分かっているとは…。まあ、いい。さてお前ら、我がAクラスについて話がある。教室は行くぞ。」

「は？我が？」

「いいから行って来い。話があるようだからな。」

明久はまた首をかしげているが、魁人が無理矢理送り出す。

「さて、皆様ご苦労だった。今日はもう終わりだ。帰っていいぞ。」

Aクラスの皆が再起した頃に、魁人は言う。

「あの、緑野くん…?」

「ん?木下さんか。どうした?」

「ちょっといい?」

「まあ、いいが…。」

優子は魁人を教室の隅へ連れて行く。

Aクラスは広いため、端にいと、あまり目立たない。

「で、どうした?」

「…緑野くんは、秀吉のこと、知ってたの?」

優子は自分の不安について魁人に聞きたいことがあるらしい。

「ああ、知ってた。明久とよく一緒にいたからな。そのとき話したりした。」

やはり魁人は秀吉を知っていたようで、理由を話す。

「じゃあ、…じゃあ何でアタシにあそこまで優しくしてくれるの?」

「ん?…どういことだ?」

「何で秀吉がいるのに、アタシにあそこまで構ってくれるのよ?」

「！」

優子は涙を流し、つかみかかりそうな勢いで魁人に聞く。

「はあ？何言ってるんだ？」

「だって、そうじゃない！皆、皆秀吉のことを知るとアタシから離れていった！アタシより秀吉の方がかわいいってね！」

「木下さん、少し落ち着け……。」

「何で、何ですよ?! 緑野くんだって、そう思ってるんじゃないの?! アタシに構ってくれるのだって、アタシが秀吉に似てるからでしょ?! それだったら、アタシは……。」

「一回、落ち着けて……。」

「……?!」

魁人はなだめるように優子を優しく抱きしめる。

「今までのやつがどうだったかは知らないけどな、少なくとも俺はそんなにつまらないことで木下さんから離れたりはしない。そもそもアイツは男だしな。何があったとしても、木下さんは木下さんだ。秀吉の代わりなんかじゃない。もっと自分に自信を持ったらどうだ？」

魁人は優子に優しくそう言う。

「緑野くん……。うわあああん!」

優子は今まで溜まっていた不安を全部流すように、泣き続けた。

「…ごめんね？取り乱して…。」

「いや、構わないさ。木下さんの役に立てたなら、別にな。」

魁人は笑顔でそう言う。

「…やっぱり、アタタを好きになってよかった…。」

「ん？何か言ったか？」

優子は小さい声で呟くと、少し笑みを浮かべる。

「いや、何でもないわ。」

「そうか？」

魁人には聞こえなかったようです。

「そういえば、奢りの話…。」

「ああ、そうだったな。何をすればいいんだ？」

優子は思い出したように言う。

「そうね…。今度の土曜日、ちょっと付き合ってくれろ？」

「ん、別にいいが…。それだけでいいのか？」

「ええ。…詳しいことは後でメールするわ。じゃあ、今日はありがとう。じゃあね。」

「ああ、じゃあな。」

そう言って、優子は帰っていった。

「魁人くんっ！」

「ん、今度は美穂か。どうかしたか？」

美穂は今のことを遠くから見ていたようで、駆け寄って来る。

「今度の日曜日、空いてますか？」

「ん、まあ、空いてるが…。どうした？」

「ちょっと、1日付き合ってください！」

美穂は聞いていたらしく、自分も誘おうと思ったらしい。

「別に構わない。それだけか？」

「はい。じゃあ、帰りましょう。」

美穂も約束を取り付けると、用は済んだようで、2人は帰っていった。

この日をもって、Fクラス中心の試召戦争騒ぎは終焉を迎えた。

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。（後書き）

はい、やっと1巻の内容終わりました。

次は…2人とのデート編をやるか、そのまま2巻に入るか、迷っています。

この頃思った。

美穂のキャラ、壊しすぎか？w

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

お知らせ。

コメントをユーザーのみから制限なしにしました。

第15話 番外編 悪鬼羅刹と…。(前書き)

全部書き終わった瞬間に画面が戻って全部消えた…。

理由は不明。前にも1回あった。

本当にやる気無くす…。

第15話 番外編 悪鬼羅刹と…。

これは魁人達が中学2年生の頃の話。

「ふああ…。」

魁人は欠伸をしながら、下校している。

…午後8時に。

なぜなら、魁人は授業中に居眠りし、そのまま誰も起こさなかったため、今までずっと寝ていたのだ。

もちろん部活は欠席だが、部員も慣れているため、放っておいていた。

「…ん？ いくら減らしても、屑ってのはいなくなるもないもんだな。」

魁人は不良に囲まれている男子を見つけ、その方へ向かう。

どこからか黒い木刀を出して。

「ぶつかってきたのはてめえだろ？」

「なら、お前が金を払うのは当然じゃねえか？」

「で、でも、そんなお金持ってない…。」

「うるせえ！黙って全額おいていきやがれ！」

「こ、困ります…。」

魁人と同じ年ぐらいの男子が高校生7人に囲まれている。

「そーいうことってんなら、手出されても文句は言えねえよなあ？」

そう言うと、不良の1人は指の骨を鳴らす。

「だよなあ。おらっ！」

不良が男子に殴りかかる。

「…さて、そこまでだ。」

その拳は男子に当たることは無く、黒の木刀に阻まれた。

「なんだ、てめえは！」

「さて！こいつのこの木刀…。」

「ま、まさか、「あいつ」か?!」

不良は魁人の正体を知っているらしく、浮き足立つ。

「うるたえるな！所詮1人だぞ！」

リーダーらしき人物が鎮める。

「…お前は早く帰れ。邪魔だ。」

「は、はい！ありがとうございます！」

その内に、魁人は男子を逃がす。

「余裕ぶってんなよ…。」

「やっちまえ！」

まず3人が魁人に襲い掛かる。

「…ふん。」

「ぐあー！」

「うっ！ー！」

「がはっ…。」

1人は喉に突きを食らい、1人は回し蹴りを脳天に食らい、1人は左手で鳩尾を殴られ、気絶する。

「弱すぎるな…。」

「く、全員で行くぞ！」

残った4人で一斉に攻撃してくる。

その瞬間、

「な、何?!」

そのリーダーの体が宙に浮いていた。

魁人が一瞬で喉に突きを食らわせたためだ。

「余所見してる暇なんてないだろ。」

「『』がはっ!!」「『』」

3人まとめて脳天を強く打たれ、意識を失う。

「屑は所詮屑…。数が集まってもこの程度か…。」

魁人はそう呟き、その場を去っていった。

「ん？…なんだ、これは…。」

帰り道、魁人は異様な光景を見た。

「凄いな…。」

それは、道の端に山と積んである不良被れ達である。

だが、その量に驚いているのではなく、

「こんだけいて、皆、素手でやられてんのか…。」

少なく見積もっても10人はいる男達が、皆傷跡が打撃、それも大ききからして拳が蹴りでつけられたものだった。

ここで魁人のついて説明しておこう。

魁人は、自分が「屑」と思ったやつを片っ端から殲滅し、交番に

届け、肅清しているのだ。

(主に不良など)

常に黒の木刀を携えて。

その姿から彼は…

『黒武者』と呼ばれるようになった。

ただ、町にとってよくない者達を相手にしているので、尊敬されたり、感謝している者もいる。

「さて、寝るか…。ん？」

くくく

魁人は家に帰り、寝ようと思ったが、誰かから電話が来たため、携帯を開く。

「もしもし。明久か？」

相手は明久のようである。

『そうだよ。また、やったらしいね。』

明久は黒武者の正体の知っているため、肅清された不良がまた出たと聞き、魁人に電話をかけてきたのだ。

「別にいいだろ。お前に迷惑がかかるわけでもないし。」

『まあ、そうだけども。やっぱり心配じゃない？』

「お前に心配される筋合いはないがな。」

『そういふこと言わないですよ。小学校からの付き合いじゃないか。』

「中学校は違うけどな。」

『そりゃそうだけど……。って、言うことがあったんだった。』

「ん、何だ？」

『変な噂が流れているんだよ。知ってる？』

「何だ？」

『魁人……。黒武者に負けない実力をもったやつが現れたって噂。』

「…へえ。」

『「悪鬼羅刹」って呼ばれてるらしいよ。ま、魁人くんなら大丈夫』

夫だとは思っけどね。』

「当たり前だ。俺は、絶対に負けるわけにはいかないからな。」

『…やっぱり、理由は話してくれないんでしょう？』

「お前に言わなきゃならない理由がないからな。」

『ま、言っと思ったよ。じゃ、気をつけてね。』

「ああ、じゃあな。」

そう言って、魁人は電話を切る。

「…俺は、やめるわけにはいかないんだよ…。あいつを守るためにも、な…。」

魁人はそう呟くと布団に入り、素晴らしい早さで眠り始めた。

第15話 番外編 悪鬼羅刹と…。(後書き)

今回はちょっと短かったかな？

雄二もまだ出してないし。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第16話 番外編 悪鬼羅刹と……。(前書き)

この番外編では、各話タイトルを統一したいと思います。

なので、この番外編のタイトルは全て「悪鬼羅刹と……。」になる、
ということですよ。

では、さようなら。

第16話 番外編 悪鬼羅刹と…。

「さて…。そろそろ行くか。」

今は前の粛清から数日経った土曜日。

夜になり、魁人は「屑探し」に出る。

昼からやらないのは、明るくて目立つため、粛清しにくいからだ。

「…行って来ます。」

誰もいない我が家にそう言うと、魁人は家を出た。

「何だ、これは…。」

しばらく歩いていると、数日前に見たような人の山があった。

「…噂の「悪鬼羅刹」か？」

魁人は犯人は「悪鬼羅刹」だと思ったようで、その名前を呟く。

「…あいつはなぜ1人で…」

魁人は悪鬼羅刹が1人で行動することに疑問があるようで、考え始める。

「…まあ、こんなところで考えてたって仕方ないか。」

魁人は再び歩き出す。

だが、この日は数ヶ所に点在する人の山を発見しただけで、1度も肅清は行われなかった。

次の日。

く
く
く

「…ちつ、何の用だ…？」

魁人はまだ眠いところを電話で起こされたため、機嫌が悪い。

「…誰だ？」

『あつ、大森だけど。』

「…健矢か？」

相手は剣道部の仲間、「大森 健矢」だった。

「…何の用だ。」

『機嫌悪いなあ。もしかして、まだ寝てたか？』

「…用件をとつとと話せ。」

健矢は魁人の機嫌が悪いのに気づき、魁人はそれを隠そうともせず言う。

『今、俺お前ん家の近くの公園に…?!』

ブツツ…。ツ、ツ…

「おい?!…ちつ、一体何があったってんだ！」

健矢からの電話は突然切れ、魁人は言っていた近くの公園に行く。

公園に着くと、倒れている健矢と、同い年ぐらいの赤髪の男がいた。

健矢には殴られた跡がある。

「…やったのは、てめえか？」

「…そうだと言ったらどうする？」

「…ぶっ殺してやる。」

魁人は既に敵意を向けていて、問うと赤髪の男は笑って答える。

「ほう…。お前がか…。」

魁人が木刀をどこから取り出すと、男はそう呟く。

「何をブツブツ言ってる？」

「おっと、あぶねえ…なっ！」

「…ふん。」

魁人は喉に向け突きを放つと、男は体をひねってかわし、その勢いで回し蹴りをするが、魁人は軽く片手で受ける。

「…お前が「悪鬼羅刹」か？」

「さあ、どうだかな…。ハッ！」

「……………」

魁人はさっきの蹴りで何かを感じたらしく、男にそう問うが、答えず、右ストレートを打ってくる。

魁人は無言でそのストレートを軽々と止める。

「本物らしいな…。本気で行くぞ!」

「返り討ちにしてやるよ…。かかって来い、屑が。」

男は魁人が黒武者だと分かっているようで、そう言つと乱打を繰り出してくる。

「…お前は、やっちゃいけないことをしたんだよ…。」

魁人は明らかにキレていて、乱打の一瞬の隙に懐に潜り込み、

「…はあっ!」

「ぐっ!」

顎にアッパーを放つ。

男はギリギリでガードした。

「…まだだ。」

「…ぐはっ…!」

魁人はアッパーした手を戻すことなく、そのまま肘打ちで鳩尾を打つ。

健矢を傷つけられてキレているため、魁人の動きは今までになく鋭かった。

「…そらっ！」

「くっ…。おらっ！」

「くっ…。」

魁人は肘打ちで離れた男に木刀で喉に突きを放つが、男は斜め前に体を出しかわし、そのまま顔を殴りつける。

だが、その勢いでそのまま体を回転させ、魁人は裏拳で男を殴りとばす。

そんな戦いが、日が落ちるまで続いた…。

「はあっ、はあっ…。」

「…はあ、はあっ…。」

2人共、疲れが隠せない。

「流石、黒武者だ…。ここまで、手こずる、とは…。」

「…お前だけは、許さねえ…。」

明らかに2人はフラフラで、どう考えても戦いを続けることは出来なかった。

「くっ…。」

「…ぐっ…。」

バタン。

2人共、遂に立っているのも耐えられなくなり、倒れる。

「はあっ、はあっ…。やっぱり、強かった…。戦って、正解だった、ぜ…。」

「…どういっ、ことだ？」

「俺は、自分から、望んで、お前を怒らせた、って、じゃあ…。」

第16話 番外編 悪鬼羅刹と…。(後書き)

遂に2人が出会いました。

そして、超大喧嘩。

アクションはなかなか上手く書けない…。

ま、上手く書けないのは全部だけどw

健矢は本編でも出そうか迷ってます。

この番外編、1話1話が短いな…w

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第17話 番外編 悪鬼羅刹と…。

「…なんだと？」

魁人は意味が分からない、というように聞く。

「そのままの、意味だよ…。俺は、お前の察し通り、「悪鬼羅刹」だ…。」

男は自分を「悪鬼羅刹」と認める。

「自分の、力を、試すためにも…、強いやつと、って思うのは、当然だろ？」

「…なあ、1つ、聞きたい。」

男の理由を聞くと、魁人は聞きたいことがある、と言う。

「…お前の、戦う、理由に、ついてだ…。」

魁人は少し回復したのか起き上がり、息を整える。

「……。」

男も起き上がり、同じく息を整える。

「お前が戦う理由、力を必要とする理由は、俺と同じ…。」

「『大切な人を守るため』なんじゃないのか？」

「!！」

魁人は推測を話し、男は凶星のようで、驚く。

「…やはりか。」

「ああ、そうだ…。」

魁人は戦う理由を聞き、納得したように頷く。

「…もう一つ。」

「何だ？」

魁人はもう一つ聞きたいことがある、と言う。

「…本当に、健矢をやったのは、お前か？」

「…気づいたか？」

健矢をやったのが本当にこの悪鬼羅刹なのか、と疑問に思っていたらしい。

「お前の思っている通り、やったのは俺じゃない。何人かの不良集団だ。黒武者に仲間がやられた、その友達らしいから、とか言っ

てたな。」

男はやったのは自分じゃない、と言う。

「黒武者の友達がやられたんなら、来るはずだと思ってな。俺も俺なりにお前の戦う理由を推察していたからな。」

「…成程な。」

男は事のあらましを話し、魁人は頷く。

「…悪鬼羅刹、お前が力を手に入れたと思ったきっかけは聞かない。だけどな…。」

「なんだ？」

「…そのことで、その大切な人を傷つけるなよ。お前が変わったことで、そいつも変わっちまわねえように、な…。」

少しの静寂が流れる。

「汚名を被るのは、俺1人で十分だ…。」

魁人はそう言うと、その場から去っていった。

「まったく、友達ならこいつを置いて行くなよなあ…。」

そう言って男も健矢を担いで去っていった。

次の日の夜。

月曜日だったため、学校を終え（体力補給のため、1日中居眠り）
、また屑を探しに出る。

「おい。」

不意に声をかけられる。

「…そっちから来るとは、感心だな、屑共…。」

そう言って、振り向くと、そこには…。

少なく見積もって50人の不良がいた。

「へえ…。こんなに多いグループなんてあったか？」

「てめえをブチのめすために、連合を組んだんだよ！」

「覚悟しやがれ！」

魁人が笑みを浮かべながらそう言うと、不良は魁人を倒すために連合を組んだ、という。

「…これはちよつと骨が折れるな…。」

魁人はそう漏らすが、笑みは顔から消えていなかった。

「…まとめてかかってこい。1人残さず肅清してやるよ…。」

魁人はそう不良達に言う。

「上等だ！」

「覚悟しやがれ！」

魁人の一言で、不良は一斉にかかってきた。

「悪いが、この人数では手加減できそうもない…。」

そう言うと、魁人は姿を消す。

「何っ?!」

「まずは5人…。」

すると、急に魁人の言葉が響き、5人の不良が倒れる。

「…更に、3人。」

また3人が倒れる。

「な、なんなんだ?!」

「慌てんじゃねえ!」

リーダーらしき男の声が響く。

「目の錯覚を利用しているだけだ!落ち着いてよく見る!」

仕掛けを見破ったらしく、目の錯覚を利用しているだけ、と言う。

「もうバレたか…。あと2、3回はいけると思ったんだが…。マトモなやつもいるらしいな。」

その通り、魁人は夜の暗さを利用し、人間の目が苦手な斜めの動きを素早く行っているだけだった。

「黒武者も数には勝てねえ!一気にいけ!」

その言葉を合図に、一気に不良が押し寄せせる。

「…こりゃ流石にきついか?」

魁人もこの人数は流石に無理がある、と思っただらしく、珍しく弱音を吐く。

「この程度でギブアップか？黒武者さん。」

第17話 番外編 悪鬼羅刹と…。(後書き)

どうも番外編は1話1話が短くなる傾向にあるようだw

最後の言葉は誰の声だったのでしょうか？

気になる人がいる程、この小説に読者がいるのか？w

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第18話 番外編 悪鬼羅刹と…。(前書き)

間違って1回投稿せずに消去してしまった…。

第18話 番外編 悪鬼羅刹と…。

「…何の用だ？」

隣から声をかけてきたのは、先日死闘を繰り広げた悪鬼羅刹その人だった。

「何の用だつてのは御挨拶だな。困ってるみたいなんで、助けてやろうと思つたんだよ。」

悪鬼羅刹は助けに来た、と言う。

「そりゃ助かるが…。お前には何の得も無いだろう、悪鬼羅刹。」

「なあに、お前で言う粛清つてやつをするだけだ。あと、俺には坂本雄二つて名前があんだから、その名前で呼ぶな。」

「なら、俺も黒武者つて呼ぶな。緑野魁人つて名前があんだからな。」

魁人、雄二共に自分をちゃんと名前で呼べ、と言う。

「了解だ。さて、行くか、魁人。」

「ああ、行くか、雄二。」

この辺で最強と言われる2人の共同戦線が、今始まった。

結果から言うと、2人の圧勝。

初めて組んだとは思えないくらいコンビネーションが良く、不良は誰1人として歯が立たなかった。

片方が片方をカバーする、リーチの違いを利用した完璧な戦い方だった。

ちなみにリーダーは、先日健矢に怪我を負わせた主犯だと判明したので、魁人の手により幽体離脱を起こすほどボコボコにされた。

「なんだ、もう終わりか。」

「ま、屑はいくら集まるつと屑ってことだろ…。」

中学生の会話とは思えない。

「で、こいつらはどーすんだ？」

「知り合いに任せる。」

魁人はそう答えると、携帯を取り出し、電話をかける。

「…あ、鈴木さん？魁人ですけど。…ええ、また運送お願いした

くて。…そうです、いつもの所…、はい…。いつもより量多めなん
で…。はい、そういうことで、お願いします…。」

電話を切る。

「誰だ？」

「知り合いの警察官だよ。俺も何度かお世話になったんだがな…。」

鈴木という警官にあとは任せたらしく、魁人も何度か捕まった鈴木に任せたと言う。

「そうか…。あ、そうだ！」

「何だ？」

雄二は何かを思い出したようだ。

「お前、昨日友達置いて帰ったろ！」

「…あ、忘れてた。」

「…ったく、友達なら忘れんなよなあ…。」

雄二は魁人の答えにため息をつく。

「そのせいで、俺はあいつを担ぐはめになったんだ…。」

「そうなのか？」

「ああ、家も分からねえし、怪我してるからしょうがなく病院においてきたんだがな。」

雄二は健矢は病院においてきたらしい。

「それは悪かったな。ありがとう。」

素直に謝り、お礼を言う。

「ま、いいけどな…。じゃあ、俺は帰るな。」

「ああ、縁があつたらまた会おうぜ。」

そう言って2人は歩き出す。

）
）
）

「ん？何だ？」

が、十分に離れる前に電話が鳴る。

「鈴木さんだ…。」

「道にでも迷ったか？」

「それは無いと思うが…。もしもし？」

雄二も戻ってくる。

『大変だ！魁人！』

「どーしたんすか？そんなに焦って。」

『お前の幼馴染の嬢ちゃんが誘拐されたって連絡がきた！』

「何だと?!」

魁人は驚きの知らせに焦りを隠せない。

「クソッ!! 目的は何なんだ?!」

『まだ分からんが…。霧島財閥の娘さんも一緒らしいからな、恐らく金目当てだろう。』

「何?! 翔子もだと?!」

雄二も話が聞こえていたようで、驚く。

「…俺達も手伝います。何か新しいことが分かったら連絡下さい。」

「

『…本当はお前らを巻き込みたくないんだが…。仕方ない、分かった。新しい情報が入り次第連絡する。』

「ありがとうございます。では…。」

電話を切る。

鈴木も魁人を信頼しているらしく、了承してくれた。

「さて、雄二…。もうちょっと、付き合ってもらおうか?」

「当たり前だ!ここまで聞いて帰れるかよ!」

雄二も憤りを感じているらしく、興奮している。

第18話 番外編 悪鬼羅刹と…。(後書き)

誘拐された幼馴染ってというのは勿論ヒロインにもなっているあの方です。

2人は無事なんでしょうか？

そして最強(最凶)コンビは2人を助けられるのか？

そして今回短すぎる！

反省しています…。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第19話 番外編 悪鬼羅刹と…。

「…ここか？」

あの後数十分後に再び鈴木さんから場所が分かった、との連絡がきた。

「ああ、そうみたいだな…。」

2人はその場所に着く。

今回の一件では警察はまだ大っぴらに動けないらしい。

そこで鈴木さんが無理を言って場所だけ知らせてくれた。

「ちて…。」

「「アイツに手を出したことを後悔するんだな…。」」

このときの2人は明らかに人間では出せない量の殺気を放っていたという。

「さて、金の要求は終わったぜ？」

「こいつら、どうするか…。」

誘拐犯は5人。

ただの金目当てらしく、強そうな風貌もまったく無い。

「…雄二、一瞬で決めないと…。」

「ああ、分かってる…。1、2、3で、出るぞ…。」

2人は突入の段取りを立てる。

「ま、放っておけばいいだろ…。」

誘拐犯はまったく2人に気づいていない。

「1…。」

雄二の声。

「2…。」

魁人の声。

そして、

「3…！」

2人の声が重なり、隠れていた物陰から飛び出す。

「な、何だ?!」

「はあっ!」

「おらっ!」

「「ぐあっ?!」」

まず2人を一瞬で片付ける。

「まずは救出成功…かな?」

そして残りの3人が呆気にとられている間に、2人は誘拐された2人の前に出る。

「美穂。誘拐犯はこれで全員か?」

「は、はい…。」

「翔子、もうちょっと待っていてくれ。」

「……うん。」

美穂も翔子も不安だったらしく、2人が来ると途端に表情が安堵に変わる。

「さあて、お楽しみ時間だぜ?」

魁人は笑みを浮かべながらそう言う。

「後悔は牢屋でするんだな！」

そして2人は駆け出す。

もちろんただの誘拐犯である3人が2人に敵うはずもなく、勝負は一瞬でついた。

「大丈夫か、美穂？」

「はい、大丈夫です。」

「…そうか。良かった…。」

そう言うと、魁人は涙を流し始める。

「魁人くん?! どうしたんですか?!」

美穂は慌てて魁人に言う。

「…悔しいんだ。」

「え？」

「俺は美穂を助けるため、もう美穂がいじめなんか受けられないように、強くなった…つもりだった。でも、その結果がこれだ…。結局俺はただの自己満足で町の不良と戦ってきた、だけだったんだな…。」

「

魁人は小学生の頃、いじめを受けていた美穂を救うために強くなりたかった、と頂垂れて言う。

「…そんなこと、無いですよ。」

「…?」

美穂は優しく微笑み、そう言う。

「確かに、私は誘拐されてしまいました…。でも、魁人くんは助けに来てくれたじゃないですか。私は、それだけで、嬉しいですよ…。それに…。」

「……………」

「…必ず、魁人くんが助けしてくれるって、信じてましたから…。だから、私はあの頃みたいに泣いたりもしてなかったんですよ?」

「…美穂…。ありがとう…。」

魁人は、涙は止まらないものの、弱く、だが微笑んだ。

雄二も翔子を慰め、全員が少し落ち着いていた。

「…とりあえず、ここから出て、家に帰ろう…。」

魁人ももう泣き止んでいた。

「そうですね…。」

美穂も同意する。

「じゃあ、俺が翔子、魁人が…。」

「佐藤美穂です。」

「そうか、じゃあ魁人が佐藤を送ってやれ。」

「分かってる。」

まだ何があるか分からないので、雄二が翔子、魁人が美穂を家まで送ることになった。

「今日は助かったぜ、雄二…。」

「俺はやらなきゃならんことをやっただけだ。礼を言われるようなことはしていない。」

魁人は礼を言うが、雄二は当然のことをしただけ、と言う。

「…ふっ、そうか…。じゃあな、雄二。縁があつたらまた会おうぜ。」

「ああ、じゃあな。」

そうして2人は別れた。

これが、『黒武者』『緑野魁人と、『悪鬼羅刹』『坂本雄二の出会いの物語である。

第19話 番外編 悪鬼羅刹と…。(後書き)

やっと番外編終了です…。

全体的に短かったですね、すみません。

美穂の小学校の頃のいじめは勝手に作った設定です。

気に入らなかった人はすみません。

次からは2巻、清涼祭編に入ります。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第20話 清涼祭シーズン！魁人マジ切れ？（前書き）

2巻、清涼祭編に入ります！

第20話 清涼祭シーズン！魁人マジ切れ？

「今日の午後は授業じゃないのか？」

「ええ。朝話を聞いてなかったの？」

今は昼休みでいつものメンバー5人で集まって昼食を食べている。

魁人は午後の授業が無い、という朝の話を聞いていなかったらしい。

「午後は清涼祭の準備に使うので、授業はないんですよ。」

「へえ…。じゃあ思う存分寝れるな。」

「…だからって寝ていいって訳じゃないと思うよ。」

美穂が説明すると、魁人は気兼ね無く寝れる、と言い久保は苦笑いを浮かべる。

「しょうがないだろ…。昨日英語の復習やってたら寝れなかったんだよ…。」

「緑野くんが授業の復習なんて珍しいね。」

「流石にAクラスであの点数は不味いと思ったんだよ…。」

魁人は前回の英語のテストの点数が悲惨だったらしく、少し勉強を始めたらしい。

「って訳で、俺は寝るからな…。」

昼食を食べ終わった魁人はそのまま寝る。

「…魁人くんにまとめ役をやってもらおうと思ったんだけど…。
これじゃ無理そうね。」

「そうだね…。それで、優子。」

「な、何?」

優子は優子の呼び方に気がついたらしく、意地悪な笑みを浮かべ優子に詰め寄る。

「なんで緑野くんの呼び方が変わってるのかな?」

「え?!そ、それは…。」

優子は試召戦争後、たまに魁人に英語を教えている。

その時に何かあったらしく、優子は呼び方を変えていた。

「ゆっくり聞かせてね」

「ちよ、ちよっと?!さ、佐藤さん助けて?!」

優子は優子の肩をつかむと、優子は美穂に助けを求めるが、

「私も聞きたいですっ!何があったんですかっ!」

美穂も助ける気は無い。

「佐藤さんまで?!」

「さあ、早く話して」

「な、何もないうつてば?!」

この後優子は昼休みが終わるまで尋問されていた。

「僕って空気なのかな…?」

「じゃあ、清涼祭で何をやるか決めるわよ。」

午後の話し合いの時間が始まり、優子が前に立って話す。

心なしか、顔に疲れの表情が見えるが。

「とりあえず、やりたいものがある人はパソコンに打って。前に表示されるから。」

すると、いくつか意見が出る。

名前は出ないようにしているので、気兼ね無く意見が出せるようだ。

「けっこう出たわね…。」

意見には喫茶店や簡単なゲームセンター、出店などの意見があった。

ちなみにいくつかの意見には「コック 緑野魁人」という記入がある。

「へえ…。…何これ？」

優子が反応したものだ。

『メイド喫茶〜ご主人様とお呼び〜』

だった。

「…どっちがご主人様なのよ…。」

優子はため息をつく。

「それでいくつかあるコックには魁人くんを、って意見は決定でいい?」

当の本人は寝ているが、確認を取る。

「別にいいんじゃないか?」

「そうね、1回もらったとき凄くおいしかったし。」

特に反対意見は出ない。

「…納得いかねえよ。」

そのまま決まりかと思っただとき、その声が上がった。

「え〜っと、柏木くん? どういうこと?」

魁人の2つ前の席の「柏木 祐樹」が反対の意見を出した。

「なんでこんな居眠りばかりしてるやつをそこまで信頼すんだよ!」

試召戦争以来クラスの中心になってきている魁人に不満があるらしい。

「ちよつと作戦が上手くいったからって…!」

そう言いながら席を立ち、魁人の椅子を思いつきり蹴る。

「ちよつと柏木くん?!」

「だ、大丈夫ですか、魁人くん?!」

優子は驚きの声を上げ、美穂は魁人の近くに寄り、心配する。

「…美穂。」

魁人は眼を覚ましたようで、美穂の方を見る。

「な、何ですか?」

見ると寒気がするような魁人の眼を見て、美穂は一瞬たじろぐ。

「…今、俺の椅子を蹴ったのは、誰だ?」

「そこにいる、柏木くんですけど…。」

そう聞くと、魁人は殺気を柏木に向ける。

「…お前か、俺の眠りを邪魔する屑は。」

「な、なんだよ。何か文句あんのか?寝てんのが悪いんだろ?」

その殺気に柏木も怯む。

Aクラスはまったく問題なしと思われるため、誰も先生はいない。

「…てめえに俺の邪魔をする権利はあるのか？」

「は？何言ってるんだ…。」

「てめえごときが！どんな理由があつて俺の邪魔をしたのか、つて聞いてんだよ…！」

いつもの魁人からは想像できない声を張り上げる。

「な、何だよ…。何切れてんだよ、お前…。」

「先に手を出したのはお前だからな？」

そう言うと、魁人は柏木を思いっきり殴り飛ばした。

「か、魁人くん?!」

美穂は慌てて魁人を止める。

「…1発は1発だ。それが、例え椅子だったとしてもな。」

元は黒武者、とまで呼ばれた魁人の本気のパンチを食らった柏木は、起き上がったはこれなかった。

「こ、これはやりすぎです…！」

「…先に手を出したのはあっちだ。それに、やったのは一発だけだ。」

魁人は気にすることなくそのまま席につく。

「…チツ、眠気も覚めちまった…。」

眠気も覚めたようで、そのまま起きているようだ。

「…魁人くん、流石にやりすぎよ。」

優子も魁人を咎める。

「…何だよ。同じ1発でもこっちが悪者かよ…。」

そう言うと魁人は席を立つ。

「ちよっと、どこ行くの?」

「屑を保健室に連れて行くだけだ。」

そう言うと、魁人は柏木を引きずり、教室から出て行く。

第20話 清涼祭シーズン！魁人マジ切れ？（後書き）

話し合いが始まりました。

そして魁人のマジ切れw

作者も寝ているのを邪魔されると本気で切れますw

そしてまたオリキャラ。

健矢は分かりませんが、こいつは多分もう出ませんw

次回、殴ってしまった魁人はクラスでどうなるのか？

話し合いは無事終わるのか？

作者にも分からなかったりしますw

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

お知らせ

この小説をお読み頂いている皆様にお知らせです。

私の使っていたPCが壊れてしまったため、しばらく活動を休止します。

いつ復帰できるかはわかりませんが、PCが直り次第必ず復帰します。

この小説を読んで頂いている皆様には誠に申し訳ないのですが、しばらくお待ち下さい。

この小説を楽しみにして頂いていた方がいるかは分かりませんが、この場にて謝罪申し上げます。

私も出来る限り早く復帰出来るように努力しますので、それまでお待ち頂ければ幸いです。

お気に入り登録して頂いている皆様、どうか作者が戻ってくるまでお気に入りを外さず、お待ち下さい。

生意気なことを言ってますみません。

お知らせ（後書き）

12月16日、更新再開。

第21話 無非難暴力？（前書き）

一応復旧しました。

ただ、完全に修復したわけではないので、また故障するかも…。

お待たせして申し訳ありませんでした。

では、どうぞ！

第21話 無非難暴力？

「まったく…。いくらなんでも、いきなり殴るなんて…。」

優子はため息交じりに言う。

しかし、Aクラスの生徒は、

「ま、やられて当然だよな。」

「緑野くんがやってくれて、すっきりしたわ…。」

「根本2世乙WWW」

どうやらやられた柏木の味方はいないようである。

「え？どういことですか？」

美穂と優子は柏木がそこまで嫌われている理由を知らなかったため、不思議そうな顔になる。

「2人は知らないのか？」

「まあ、女子にも正体が知られ始めたのは2年になってからだからだが
らな。」

そう言って2人の男子が説明に入る。

「ん？名前を出されないってことは……。モブ？」

「「そういうことを言うな?!」「」

愛子が疑問を投げかけると、2人は悲しそうに返す。

「と、とにかく! あいつはBの根本と変わんないやつだったこと!」

「すげえ自己中でな。何事も自分が一番じゃないと嫌だってな。だからチャホヤされてる緑野が気に入らなかつたんだろ。」

「女子の前でだけはいい顔してな。ま、2年になって女子にも知られてきたらしいけどな。」

「あとは根本と同じだ。多分、カンニングしたやつが今Aクラスのやつだったんだろ…。」

「へえ…。そうだったの。」

優子は納得して頷く。

「ま、そういうことなら放っておきましょう。魁人くんは…まあ、正当な制裁を加えたってことで。」

「…でも、それじゃつまらないと思わない?」

優子が今回のことは先生には黙っておく、と言つと、愛子が口をはなむ。

「ぶひひひひとっ」

「今回のことを使ってちょっと緑野くんに意地悪しようってこと」

愛子は楽しそうに言う。

「…何をやらせようって?」

「ボクが考えてるのはね…。ま、定番だけど、女装?」

愛子が自分の考えを言うと、何人かが賛成する。

「おもしろそうじゃないか?」

「ええ、いつも冷静だしね…。」

「せっかくの清涼祭のシーズンなんだ、そのぐらいはいいんじゃないか?」

「じゃあ、戻ってきたら皆で言おうよ!」

『賛成〜!!』

愛子の呼びかけに、魁人の制裁(?)が決まる。

魁人の体型、顔から考えて、反対する要因は見当たらないと思っただろう。

「…何だ？集まってきた。」

魁人が帰ってくると、皆が魁人に集まり、魁人は苦笑いを浮かべる。

「今回のことでき、緑野くんは悪くないとしても、殴っちゃったのは事実じゃない？」

「まあ…。そうだな。」

「その前後の成り行きを考えて審議した結果！緑野くんの刑罰が決まりました。」

やはり、愛子が代表して言う。

本当のクラス代表は興味が無いのか、自習している。

「ズバリ！女装です。」

「…なぜそうなった？」

魁人は意味が分からない、と首を傾げる。

「いいから！拒否権はないよ！」

「…まあ、別にいいけど…。しかし、俺の女装を見ても何の得にもならんだろうに…。」

魁人は渋々引き受ける。

「じゃあ、美穂、手伝ってくれ…。」

「あ、はい！」

2人は教室から出て行った。

「どうなるんだろうね？」

「…洒落にならない結果になったらどうするのよ…。」

愛子は楽しみのようだが、優子は似合いすぎたときのことを考えている。

「ごめん、待たせちゃった？」

数分後、2人が教室に入ってきた。

1人は美穂、もう1人は…。

「…え？もしかして、緑野くん？」

「そうだけど…。やっぱり、変かな？」

どう見ても女子にしか見えない魁人の姿だった。

「っていうか、何で化粧まで?!」

「中途半端は嫌だったからね。美穂にやってもらったんだ。」

魁人の顔には化粧がしてある。

「言葉遣いも、変えたよね?」

「うん。ま、こうしたほうが女子っぽいかな?って思ってた。」

そして、口調も元気な女子の口調になっていた。

「中途半端が嫌だって言っただってこれはやりすぎでしょ...。」

「負けたと思った女子が多数いたらしく(ほぼ全員)膝をついてい
る。」

「しかし...。本当に緑野くんかい?そうは見えないな...。」

「本当だよ?...そして、何故か危険な予感がするんだけど?」

男子が何人か顔を赤らめている。

「...とりあえず、着替えてきなさい。似合すぎて洒落になって
ないわ。」

「え、もったいない...。こんなに可愛いのに」

愛子はそう言って魁人に抱きつく。

「ちよ、ちよっと?! 私が誰だか分かってる?!」

「あ、忘れてた…w」

魁人は慌てて愛子を引き離し、愛子は笑みを浮かべてそう言う。

「…でも、ここまで着替えると戻るのも面倒なんだよね…。」

「じゃあ、そのままでもいいんじゃない?」

魁人はここまで手が込んでいると戻るのも面倒だと言い、愛子はなら戻らなければいい、と言う。

「ま、そうだね。このままでいいか」

男子の歓声上がる。

「…なんで?」

「気にしない、気にしない」

魁人は顔を引きつらせる。

「ちよ、ちよっと、本当にそのままにいる気?!」

「そ、そうですね!いくら似合っても、そのままは駄目です!」

愛子の抱きつきを見て少し意識を飛ばしていた2人が正気に戻り、焦って言う。

「だって、面倒なんだもん。」

魁人は一言で切って捨てる。

「でも…!」

「もう駄目です、木下さん…。あそこまではっきり言っただけは、もう決めているってことです…。」

優子は尚も食い下がるが、付き合いが長い美穂はもう諦めている。

「そういうことじゃあ、話し合いに戻ろうか」

魁人がそう言うと、皆が席に戻る。

その後の話し合いは、「魁人コック派」と「魁人女装接客派」に分かれて、かなり論争が続いたらしい…。

第21話 無非難暴力？（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした！

これからお待たせしてしまった分、前までより頑張っていきたいと思えます！

っていうか、どこで魁人とFクラスを絡ませよう…。

次も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第22話 Aクラスが決まるのは早かったんです。(前書き)

前回説明し忘れてしまったんですが、Aクラスだけあって出し物を決めたのは早めです。

第22話 Aクラスが決まるのは早かったんです。

「ん〜、やっと決まった〜。。」

まだ女装したままの魁人が体をのばしながら言う。

「でも、大丈夫なの？ 魁人くんの負担が大きすぎると思うんだけど。」

「大丈夫、大丈夫 それに、そうしないといつまでたっても決まらなかったでしょ？」

魁人が調理と接客（結局メイド喫茶になった）の両方をする事に、優子は心配なようである。

「でも、両方出せるならそれに越したことはないからね。」

愛子は魁人が両方できるならそれが一番いい、と言う。

「料理なら多少できる人はいますから、メインは接客ですよね？」

美穂は魁人のメインの仕事は接客、だと言った。

「まあ、そうなるかな。じゃあ、私は帰るね。」

「ちょっと、そのまま帰る気?!」

「帰るときぐらい元に戻りましょうよ?!」

「でも、それはそれで面白いからいいんじゃない?」

「「よくないわよ(です)!!」」

魁人は女装をとく気はないらしく、そのまま帰ろうとする。

「ばいばい」

「待ちなさい?!」

「ちよつと、魁人くん?!」

「ばいばい」

魁人は本当にこのまま帰る気らしく、教室から出て行く。

優子と美穂は追いかけていき、愛子は手を振る。

「ん?どしたの?」

「どしたの、じゃないわよ!本当にそのまま帰る気?!」

「そうですね!いくら似合っても、そのまま帰るのは駄目です
「!」

優子と美穂は魁人に追いつき、引き止める。

「別にこのままでも分かる人なんていないって」

「それでも駄目ですっ！」

魁人は着替えるのが面倒らしく、そのまま帰ろうとする。

「何を騒いでいるんだ？」

「工藤さんと木下さん？」

そこに偶然通りかかった明久と雄二。

「……………（バシャバシャ）」

勘でシャッターチャンスを察知した康太。

「2人が家に帰してくれなくてさ。」

「…誰？」

明久と雄二は誰か分からないらしく、首を傾げる。

「そんな、酷いよ！明久は小学校から一緒なのに！雄二だって本気で闘りあった仲じゃない！」

魁人はわざとらしく言い、泣く素振りを見せる。

「は？一度、本気で…？」

「え…。まさか…。」

「やっと分かってくれた？」

「「魁人?!」」

2人は魁人の正体に気付き、声を上げる。

「…そりゃ、分からないわよ…。」

「ですよ…。どう見ても、女子にしか見えませんから…。」

優子はため息をつき、美穂は苦笑いを浮かべる。

「…お前、女装趣味があつたのか？」

「まさか。明久じゃあるまいし。」

「僕だつてないからね?!」

雄二が顔をしかめると、魁人は明久をいじり、明久は全力で否定する。

「私達がちょっとふざけて言ったら本当にやって…。」

「…洒落にならないことになったんです…。」

女子2人は少しブルーになる。

「ま、そりゃそうか。魁人は明久とは違うもんな。」

「僕だって違うからね?!」

「それが入学式に女子の制服で来た人の言うことなの?」

「うっ!!そ、それは…。」

雄二と魁人はなおも明久をいじる。

「2人とも、そろそろやめてあげなさい。」

「しょうがないな。」

優子が歯止めをかけ、明久いじりは終わる。

「で、Fはもう決めたの?」

「は?何をだ?」

「何をつて…。清涼祭の出し物に決まってるじゃない。」

魁人が雄二に問うと、雄二は意味が分からないらしく、聞き返す。

「決めた訳ないだろ。まだ全然後の話だしな。」

「もう1ヶ月を切ってますけど…。用意間に合ってますか?」

「さすが、Fクラスね…。」

美穂はそれでちゃんと用意が出来るのか気になり、優子は呆れたように言う。

「で？康太はいつまで写真を撮ってるの？」

「……新しい売れ筋の予感。撮っておくに越したことはない。」

「そろそろ金とるよ？」

「……仕方ない。」

康太は自分の出費は嫌らしく、撮影をやめる。

「撮らせてあげてたんだから、いくらか分け前は頂戴ね？」

「……分かってる。協力してくれたから、分け前ぐらいは、出す。」

康太も協力者への礼は尽くすようだ。

「じゃ、そろそろ帰るね！2人ともばいばい」

「ああ、じゃあな。」

「またね。」

「……じゃあな。」

3人は魁人を見送る。

「ちょっと、そのままじゃ駄目だって！」

「止まってください！」

優子と美穂は後を追いかける。

「…で、何であいつはノリノリだったんだ？」

「口調も変わってたね…。」

「…：…売れ行きがよくなるなら、それでいい。」

魁人のノリ度に、明久は苦笑いを浮かべ、雄二はため息をつき、康太は新作に満足そうな表情を浮かべる。

「…本当に、あれが元黒武者か…？」

昔の魁人を一番よく知っている雄二は、一番微妙な表情をしていた。

この後、結局2人は止められなかったらしく、学園で誰も知らない謎の美女の噂がたった。

第22話 Aクラスが決まるのは早かったんです。(後書き)

前より短くなってるかな？

次から長めにするように心がけます…。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第23話 え？いや、女装が趣味じゃないって！

「おはよーっと。」

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

魁人が挨拶をしながら教室に入ると、美穂と久保が返す。

「今日は一日中準備だったか？」

「そうだよ。午前・午後両方ね。ある程度なら下校時間を遅らせ
てもいいみたいだ。」

「でも、随分準備期間が長いですよね…。」

美穂は疑問をもっているようで、問うように魁人を見る。

「ま、ここはいわばまだ試験中の学校だからな。こういうところ
で評価を上げたいんだろ。だからしっかり準備してもらったために、
期間を長くしているんだと思うが。」

「…なんでそんな簡単に真意に近いものを当ててるかな。」

「本当かどうかは分からないぞ？あくまで推測だからな。」

「…でも、本当にしか聞こえませんかよね…。」

魁人の推理力に2人は苦笑いを浮かべる。

そうしていると、

「戻ったよ。あ、緑野くん、来たんだ。」

「ちゃんと借りてくれたわよ。」

既に学校に来ていた愛子と優子が紙袋を持って教室に入ってくる。

「ご苦労様。女子に行かせて、悪かったね。」

「別に構わないよ。」

「どうせ、秀吉に貸してもらっわけだし、アタシは行ったほうがいいでしょ。」

紙袋の中身は演劇部にあった衣装らしく、借りてきたらしい。

「しかし、衣装代ぐらい、Aクラスなんだから言えば予算から出せるだろ。」

「その分、食料の方にまわすみたい。ま、いくらか余るみたいだけれどね。」

予算の多くを食べ物に使っらしい。

「それと、秀吉から聞いた話によるとまだFクラスは出し物も決めてないみたいよ。」

「…さすが、Fクラスって感じかな？」

「ま、そんなことだろうと思ったけどな。」

久保は苦笑いで言い、魁人は予想できること、と言う。

「あいつらもちゃんと時がくればやるさ。絶対にな。」

「…毎回だけど、分かっているような言い方をするわね。」

「こつこつという言い方をするときは、大体確信があつてのことだからね。」

魁人は絶対にFクラスが動く理由があるらしく、間違いない、というふうにする。

「ま、理由は大きく2つ、細かくて4つ、だな。」

魁人は指を立てつつ、話す。

「ちよつと、聞きたいなあ？」

愛子は興味がでてきたようで、魁人に言う。

「ああ、大きく分けたときの1つ。これは簡単だ。ある生徒の体質。」

「…姫路さん、かな？」

「正解だ。」

1つ目の理由は、姫路の体の弱さ、と言う。

「さすがに体の弱い娘をあの教室におきたいとは思わないわよね。」

「ああ。それが2つ目の理由だ。Fクラス的环境。これが3つに分かれる。」

魁人はFクラス的环境、という要因が3つに分かれると言う。

「まず最初に校舎自体の老朽化。これは生徒になんとかできる問題じゃないからとばす。」

「2つ目は？」

「教室の環境。ま、これも分かるだろう。姫路さんの体の弱さを考えても、あの教室におくことはいいことではない。」

「最後はなんですか？」

「最後は…。周り、人員の環境ってところだな。姫路さんの成長を促す、同クラスのライバルとなりえる存在が、Fクラスにはいない。ま、いたらあんなに簡単には勝てないわけだが。」

魁人は4つに理由を話し、その根拠を言う。

「ま、これらの理由から、姫路さんは転校させられる可能性が高いってわけだ…。それを阻止するために、何人かは真面目に清涼祭に臨もうとするだろう、ってことだ。」

「毎度ながら、緑野くんの話には説得力がありすぎるよね…。」

「本当にしか聞こえないわ…。」

愛子と優子はため息をつきながら言う。

「ま、そういうことだから、Fクラスの心配は無用だ。」

「よくわかったよ。」

全員が理解したようで、Aクラスの準備に移ろうとする。

「じゃあ、俺は衣装合わせでもするか。美穂、手伝ってくれ。」

「あ、はい、わかりました。」

「…って、何で魁くんが最初なのよ！」

魁人は衣装合わせ、と言い美穂と廊下に出て、優子はその様子に叫び声をあげる。

「…優子、ちょっと声大きすぎかな？」

「うう、ごめん…。」

そして愛子に静かにしかられる。

「終わったよ」

そう言って、魁人は教室に戻る。

「あ、終わった…。……………」

「どう？似合ってるかな？」

魁人は教室に入ると服装を見せびらかせるように動く。

「う、うん。似合いすぎて、洒落にならないくらい。」

「…まったく、本当に魁人くんか疑いたくなるよ。」

「あはは ありがとう」

女子となった魁人はまた口調を変え、明らかに女子にしか見えなくなっている。

「…そして何か前より嫌な予感が。」

「気にしちゃ駄目よ…。」

優子は気にするな、と言っが、本人も何か考えているようで涎がおちそうになっている。

「…女装美少年と男子…。吉井くん？いや、話が進まない…。坂

本くんかな？」

「…怖い想像をするのはやめて。」

「え?! 妄想なんかしてないわよ?!」

「…誰も妄想とは言ってないよね。」

「うつ?!!」

優子は若干自滅気味な感じになる。

「ま、いいか! 私が大丈夫なら、皆も大丈夫…、と信じたいね。」

魁人が言葉を濁らせて言う。

なぜなら、大半の女子が膝をつきブルーになっただいからだ。

「ま…、まあ、大丈夫だよ!…きつと。」

愛子も少しはショックがあるようで、言葉を濁す。

「何で私が出てくると女子はブルーになって、男子は…、やっぱりやめとこ。」

魁人は女子のときのことを別の人格のように言い、男子に恐れを抱いているように言う。

「でも、それって魁人くんが好きでやってることですよね?」

「まあ、そうなんだけど…。」

魁人は二重人格者とかそんなのではないため、やりたくてやっているわけだが、少しやりすぎを感じているようだ。

「…まあ、やめる気はないけど。」

「…はあ。」

魁人の言葉に美穂は少しため息をつく。

「また、戻るの面倒になっちゃったなあ…。」

「また戻らないんですか?!」

「面倒だからね。」

そしてまた今日も女子でいくらしい。

「…楽しくなってきたませんか?」

「まさか。」

魁人は即答するが、明らかに顔が笑っている。

「とりあえず準備!ほら、皆ちゃんと動いて!」

元々男子の指揮は魁人がとっていたが、女子になった(?)ことで女子の指揮もしている。

「…あのキャラが合いすぎて緑野くと別の人間に思えてくるよ。」

「…いつそのこと別の人間として名前つけちゃう？」

久保がいまだに信じられない、というような顔をし、愛子は名前をつけて別の人間として扱ってもいいんじゃないか、と言う。

「つけるのは構わないけどさ、別の『人間』じゃなくて別の『人格』ってことにしてよ。」

「何、そのこだわり…。」

魁人は命名の許可を出すと1つ条件をつけ、愛子はため息をつく。

「別の人間じゃあ『俺としての楽しみがないだろ？』」

途中から声を元に戻して言う。

「…本当に人格が2つあるみたいだな。」

「…っていつか、やっぱり楽しんでるよね。」

2人は苦笑い&ため息というもはや日常的に行っている動作をする。

第23話 え？いや、女装が趣味じゃないって！（後書き）

魁人は女装を楽しんでるんじゃないって、女子としての演技を楽しんでいます。

1回秀吉と会わせてみようかなw

ま、どうなるかまったく無計画ですがww

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第24話 Fクラスで生きるためのルール。

「…暇なんだけど。」

魁人は机に突っ伏して言う。

「しょうがないじゃない。その格好で準備して汚されたらまずいもの。」

優子は魁人がまだ着ているメイド服を汚されたら困る、と手伝わせないつもりらしい。

「…じゃあ、ちょっと出てきていい？」

「バレなければ、ね。」

「大丈夫だよ じゃあ、行ってくるね。」

魁人は元気に飛び出す。

「おじゃましてす。」

そして来た先は…。

「お前?! またそんな格好してるのか?!」

雄二。

「ちよつと、また女装?!」

明久。

「……。(バシャバシャ)」

康太。

もちろん、この3人がいるのだからFクラスである。

「清涼祭の衣装だよ クラスの出し物のね」

魁人は極めて元気に言う。

「あ、須川くん!」

そして、試召戦争で再会していた中学部活のライバル、亮に声をかける。

「あ、おい、やめろ?!」

亮はもう正体に気付いているらしい。

「何だ、つまんないの〜。」

魁人はFクラスでのこの行為がいかにも危険な行為か分かっている
ので、頬を膨らませる。

『異端審問会を始める!!』

そして、黒装束の鎌を持った大軍が亮に襲い掛かる。

「来るなあああー！！！！」

そしてウサイン・ボルトもびっくりの速さで逃げていった。

「あああ……」

明久は事情が分かっているため、可哀想な視線を向ける。

「人数減っちゃったね。」

「何だ？お前は女装が趣味なのか？」

「違うよ！あくまで女子としての演技を楽しんでるんだよ！」

「……意味が分からん。」

雄二はため息をつく。

「お主……。もしや。男なのか？」

「うん、そーだよ！」『つてか、俺のことを忘れたって言う気か？』

「

秀吉が話しかけてきたので、魁人は声を途中から元に戻して話す。

「…もしかして、魁人か?!」

「やっと分かったの〜?」

声を女子に戻して答える。

「あんた…。試召戦争でアキとやったやつ?!」

「なんでその格好なんですか?!」

今度は姫路と美波が言う。

「そっだよ?この格好なのは衣装合わせをしたから。」

平然と答える。

「女子にしか見えん…。魁人、お主演劇部に入る気はないか?」

秀吉は魁人の演技力に興味を持ったらしく、勧誘する。

「部活はなあ…。『面倒だから、やりたくないんだが。』」

魁人は面倒だから、と男子の声で答える。

「うむ…。そこまでの演技力があるのに、もったいないのお…。」

「ごめんね?秀吉くん。」

魁人は女子の声に戻して言う。

「よく平然とそういうことできるよね。」

「明久くんには言われたくないな。」『さすがに女子の制服を家からは着て来ない。』

家から来るときにはさすがに着ない、と魁人は言った。

「僕だつて着てこな」着ただろうが。「…すみません。」

雄二に突っ込まれ、明久はorz。

「吉井くん、そんなことしたんですか？」

「してな」『嘘をつくな』「…しました。」

男子の魁人と雄二にまた突っ込まれ、更に落ち込む明久。

「ま、明久は放っておいて…。『ちょっと、須川助けてくる。俺のせいだしな。ちょっとやりすぎた。』」

「…やっぱり楽しんでたか。」

魁人はそう言ってでていき、雄二は再度ため息をつく。

「…アンタ、あいつといるとため息が増えるわね。」

「………言つな。」

「……………。(コソコソ)」

雄二はまたため息をつき、康太は魁人のあとを追う。

この後、メイド服を着、黒い木刀を持った女子が黒装束をなぎ倒している、という変わった写真が出回ったらしい。

「ただいま。」

暴れまわったのにも関わらず、なぜか服の乱れがない魁人は涼しい顔でAクラスに戻る。

「おかえり。どこいったの?」

「ちょっとした暇つぶしだよ。」

優子が声をかけると、魁人は机に突っ伏して言う。

「…そして寝るのかい?」

「ちょっと運動したからね。」

そして魁人は眠りについた。

「あれ？ムツツリーニくん？」

康太がそれを撮りまくっている。

「……後で販売する。」

逃亡。

そして財布の中身を確認する人多数。

「…本当にこれがAクラスかい？」

「ちょっと、疑いたくなるね。」

そして久保と愛子の恒例のため息。

第24話 Fクラスで生きるためのルール。(後書き)

今回は作者が美術の宿題を終わらせてないため、短めです。

すみませんでした。

ちなみにこの話では、須川はけっこういい人に書くつもりです。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第25話 やっぱり暇だから戻る！

「う〜…。」

魁人もずっと寝ていたため、流石に目が覚めたのかもう寝ていない。

「暇ならいい加減着替えてきなさい。じゃないと手伝わせないわよ。」

「…しょうがない。」

魁人は流石に退屈には勝てなかったのか、着替えに行く。

「やれやれ、やっと戻るのかい。」

ため息要員の久保「この頃扱いが酷いよ?!」…何でこっちに入ってくるんだ。

「で？何をすればいいんだ？」

「ん〜、特に手伝ってほしいことは無いかな？」

魁人は着替えたため、何か手伝いたいが、愛子は何も手伝えるこ

とは無い、と言う。

「じゃあ、何で俺は着替えたんだけ？」

「本当は男子だからに決まってるでしょ。」

「そもそも女装してて気にならないのがおかしいと思うんですが……。」

魁人はそれじゃあ元に戻った意味が無い、と嘆く。

「じゃあ、適当にあっち手伝ってくる……。」

そう言っつて魁人は人だかりの方に向かう。

その時。

『ピンポーン』

「……放送？音がちゃっちな。」

『2年Aクラス、緑野魁人くん、2年Aクラス緑野魁人くん、教室にきてください。繰り返します……。』

「俺か……。ちょっと行ってくる。」

「いつてらっしやい。」

コンコン。

「失礼します。」

魁人は教頭の竹原に挨拶をする。

(俺、この人苦手なんだけどな…。)

「よく来た。とりあえず座りたまえ。」

教頭は座ったまま言う。

(…この人を見下した態度が嫌なんだよ…。)

「何の御用ですか？」

「君に頼みがあつてね。清涼祭で召喚大会があるのを知っているかい？」

「はい、一応…。優勝者に腕輪と遊園地のチケットが贈られるつて言うつ…。」

「そうだ。君にはその大会に出場し、優勝してもらいたい。」

「…そんなことを急に言われても、困るんですが…。何か理由でも？」

「そのことなんだがな…。」

教頭は一度言葉を切る。

「…あの腕輪には異常がある、と報告を受けてね。そんなものを生徒に渡すわけにはいかない。」

「……………」

魁人は教頭の様子を伺うように注意深く見る。

「だから、成績優秀な君に頼もうと思ったんだが…。」

「…嘘ですね。」

「何？」

「それなら、最高得点者の霧島さんに頼めばいい。それに…、俺には嘘は通用しませんよ？」

鋭い眼つきで教頭に言う。

「チツ…、黙って協力すればいいものを…。」

「ほら…、すぐ本性が出た。」

「だが、君には拒否権などないのだよ。…君には、大事な友達を見捨てることは出来ないだろう?」

「…何だと?!」

教頭は嫌な笑みを浮かべ、言う。

「私とその気になれば、いつでも手出しは出来る。…分かるな?」

「…フツ…。ハハハハ…。」

魁人は急に笑い出す。

「どうした?気でもおかしくなったか?」

教頭は笑みを浮かべたまま言う。

「…てめえは俺をそんなことで縛れると思ってるのか?」

「…何?」

「俺は黒武者だ…。いくらでもかかってきやがれ!まとめて、てめえの計画ごとぶっ潰してやるよ!…!」

「…そうか。それに戻ってでも守る、か。…やれるなら、やってみるといいさ。」

「言われなくても、な。」

そう吐き捨て、魁人は教頭室から出る。

「…あいつらを守るためなら、俺はいつだってあれに戻ってやるさ。」

魁人は真面目に、鋭い眼つきで言う。

「…ただいま。」

「おかえり〜…。どうしたの?」

帰ってきた魁人に優子は不思議な違和感を感じ、聞く。

「…何でもない。ちょっと、行くところがあるから、悪いな。」

「え、ちょっと?!」

「本当は、誰も巻き込みたくないんだがな……。」

「…雄二はいるか？」

来たのはFクラス。

「あ、魁人！ちょっと待ってて…。」

反応した明久が雄二を呼ぶ。

「悪いな。」

「どうかしたのか？」

呼びに行っている間に亮が来る。

「須川か。色々あってな…。」

「…流石に何度も試合をやってんだ。お前の変化ぐらい、分かるぜ？」

「…やっぱ、ばれたか…。」

魁人は亮に本心を見抜かれ、予想していたことだが驚く。

「……………そうだな。」

魁人は少し考え、結論を出す。

「須川の腕を見込んで頼みがある。雄二も呼んでるから、ちょっと来てくれるか？」

「ああ、分かった。」

魁人は雄二に頼むことを亮にも頼むらしく、一緒に来るように言う。

「呼んだか？」

「……………。」

「おい?!無言で首をつかんで引きずるな?!」

廊下に引っ張っていった。

第25話 やっぱり暇だから戻る！（後書き）

あゝ、スランプです。

なかなか長く書けない…。

すみません！

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第26話 協力要請 (前書き)

これからは大体2、3日に1話の投稿になりそうです…。

一応、受験生なので…。

すみません。

第26話 協力要請

「で？何で俺らを呼んだんだ？」

雄二が聞く。

「ちよつと、協力してもらいたくてな。」

「…真剣な話みたいだな。」

魁人は至って真面目に言うと、2人は表情を引き締める。

「…俺がさっき教頭に呼び出されたのは知ってるか？」

「俺は知ってる。さっき放送で流れてたからな。」

「多分、俺は逃げ回ってたときだから聞いてない。」

雄二はずっと教室にいたため聞こえたが、亮はさっきまでFFF団の追尾にあっていたため、聞こえていなかったらしい。

「ま、俺が呼ばれたことは今言ったからいい。それより、重要なのは話の内容だ。」

「内容？」

「ああ。」

魁人は一呼吸置いて話す。

「あいつは…。俺を脅迫してきた。俺の知り合い…。Aクラス、Fクラスのやつに手を出されたくなければ、あっちの指示に従え、つてな。」

「それで？お前は受けたのか？」

「受けるわけねえだろ。もちろん断ったさ。だから、お前らにFをしっかりと守ってもらいたくてな。」

魁人は雄二と亮にFクラスを守るよう頼む。

「ま、そりゃ受けるが…。」

「お前がいなくても俺達は襲撃されたら守ったぜ？」

「それがある、って知ってるるときと知らないときじゃ体の反応がまるで違う。心構えも出来てるからな。Aクラスは俺に任せていいから、お前ら2人はしっかりとFクラスを頼んだぜ？」

「もちろん、分かってるさ。」

「だが、お前…。もし、Aクラスに何かあったら…。」

「分かってるよ。命に代えても、俺以外のやつは守る。お前の彼女…嫁もな。」

「ち、違いぞ?!」

魁人はここで話す理由を話すと、亮は頷き、雄二は魁人を睨みつ

け言った。

魁人はこの場でも人をいじるのをやめないが。

「じゃあ、今言えるのはこれだけだ。……頼んだぜ。」

「分かってる。」

「こっちは任しときな。」

魁人は真面目な表情に戻り言うと、2人とも力強く頷く。

「戻ったぞ……。」「

「あ、おかえりなさい。どこに行ってたんですか?」

「何か、この頃よくどっか行くよね。」「

教室に戻った魁人を出迎えたのは、美穂と愛子。

「ああ……。何か手伝うことは出来たか?何もなければ少し寝てた
いんだが……。」「

「別に、寝てていいんじゃない？」

「そうですね、まだ清涼祭の日は遠いですから、やれることも少ないですし。」

「そうか……。じゃあ、ちょっと寝かしてもらおうな。」

今はまだ機材などの運び出しくらいしか大っぴらな作業は出来な
いため、動いている生徒は多くない。

優子と久保はそれぞれ男女の代表格なので、動いているが。

「何かあったら起こしてくれて構わないからな。」

「分かった。おやすみ〜。」

「おやすみなさい。」

既に公認されている魁人の居眠り。

「……………野くん。緑野くん。」

「…ん…、どうした？」

愛子に起こされて、魁人は目覚める。

「Fクラスの坂本さんと吉井くんが呼んでるよ。」

「分かった。ありがとう。」

魁人は立ち上がり、2人のもとへ行く。

「どうした？」

「魁人に相談したいことがあるんだけど。」

明久が話を切り出してくる。

「姫路が転校してしまうかもしれないらしい。」

「…やっぱりか。」

魁人は予想していたことが起き、少し顔を歪めて見せる。

「ま、お前なら予想はついていたと思うけどな。」

「ああ、予想はしていた。だから理由も言わなくていい。だけど、雄二がいれば何とかなっただろ。」

「そうなんだが、明久がお前にも協力してもらおう、って聞かなくてな。」

「…やれやれ。」

「いいだろ？ 魁人も姫路さんとは小学校一緒なんだから。」

明久が魁人にも協力してもらおうように言った、と雄二が言うと、仕方ない、というように魁人が言い、明久と同じ小学校だったため姫路と同じ小学校であった魁人（ほとんど会話はなかったが）も協力するように言う。

「別に構わないが…。雄二がいるから、大体の理由は分かってるんだろ？ それと、解決策も。」

「ああ。一応協力してくれるやつには説明した。」

「なら、俺に何をしろと？」

「それは明久に聞いてくれ。」

「え？！ え〜つと……。」「

明久は急に名指しされ、拳動不審になる。

「…おい、馬鹿。まさか、手伝えとか言っついて、何をさせるかも考えてないのか？」

「しょうがないだろ。明久は馬鹿なんだ。」

「今、明久と書いてバカと読んだな?!」

「うるせえ。何も考えてないのが悪い。」

「うつ?!」

明久は正論を突きつけられ、押し黙る。

「やれやれ…。俺はAクラスだからな、そこまで考える義理はないぞ…。何を手伝わせるか考えたら、また来い。」

魁人は遠回しに何をすればいいか考えたら手伝う、と言うが、

「そんな言い方はないだろ!少しは姫路さんの身になって」黙れ馬鹿。「ぐふう?!」

明久はその真意を読み取れず、魁人に食ってかかり、雄二が黙らせる。

「ったく、ここまで馬鹿とは…。邪魔したな、魁人。」

「ああ、ちゃんとやるべきことを整理してから来い。あと…。」

魁人は雄二に近づき、小さい声で話す。

「…そつちも大事だろうが、俺の頼みも忘れないでくれよ?」

「…分かってるよ。どつちかと言うとそつちの方が大事そうな雰囲気だしな。」

雄二も今回の陰謀が学園に関わることだと直感的に理解している
ようので、真面目に言う。

「…野生の勘ってやつか。」

「黙れ。」

魁人は親友をいじるのも忘れない。

第26話 協力要請。(後書き)

やっぱり短いなあ…。

更新周期が長くなるのに短いんじゃ、申し訳ないです。

なんとかスランプを脱したい…。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第27話 仲間たちの思い。(前書き)

更新がこんなに遅くなってしまい、本当にすみません！
多分受験が一段落するまでこんな感じだと思います…。

今回は魁人が協力を要請した2人の心情をそれぞれの立場でお送り
します。

独り言的な感じで進めていきます。

では、どうぞ！

第27話 仲間たちの思い。

（亮 part）

「まったく…。緑野も教頭の言うことぐらい聞きゃあいいのに。」

「ま、あいつはそういうやつだからな。」

「自分の正義を貫き通す。」

「悪だと思ったものに対しては妥協など一切しない。」

「しっかし…。やっかいなことに巻き込んでくれたもんだ…。」

「…よく考えてみると、俺はただ巻き込まれただけじゃないか？」

「坂本だって、悪鬼羅刹と呼ばれるぐらいだし、相当腕も立つだろう。」

「別に坂本1人でもよかつたんじゃ…？」

「…今更か。」

「…また、これを握ることになるとはな…。」

「素振りですべて使っていた木刀。」

「俺は高校で剣道をやめた。」

「もう、これを持つこともないと思っていただけだな…。」
俺が剣道をやめた理由。

それを思い出すと、1つ気がかりなことが出てきた。

「…あいつの膝は完治しているのか？」

そう。緑野が剣道をやめるきっかけになった、膝の負傷。

俺と緑野は全国大会、個人決勝で戦った。

その試合で、俺はあいつに勝った。

…緑野魁人の、負傷退場という、納得のいかない形で。

それで剣道に対する意欲がなくなり、俺は剣道をやめた。

その膝が、もし治っていなかったら？

「…無駄な心配か。」

そもそも、ただのチンピラ退治で再発などしないだろう。

喧嘩と剣道で使う力も筋肉もまったく違うのだから。

「…何で、あいつは俺に普通に接せるんだ…？」

久しぶりに素振りをしてみると、いくつか思つこともでてくる。

あの時、俺は優勝し、あいつは負けた。

実際戦つてもいないのに。

そんなことがあれば、その時優勝したやつを憎んでいても不思議ではない。

…本当なら、自分が優勝していた、と。

でも、あいつにはそれがまったくない。

「…優しいのか、ただの馬鹿なのか…。」

ただ、俺を信頼して頼んでくれた。

そのことに変わりはない。

「…期待には、答えなきゃな。」

そんなことを、一心不乱に素振りを続けながら、思ってみたりする。

（雄二 part）

「まったく、少しは勉強しとくべきだったか？」

そう思う理由。

Aクラスにいる、俺の大切な幼馴染。

今の俺では守ることができない。

「…守るために強くなったのに、これじゃ情けねえな。」

ただ、だからといって、今の自分に後悔はない。

今の自分でなければ、こんなことは頼まれなし、そもそも魁人と出会ってもない。

…まあ、あの馬鹿とも、だが。

「あいつを守れなかったら、承知しねえからな？」

そんなことを、1人呟いてみる。

確かに、魁人があいつを守れなくて、傷ついたりしたら、犯人はもちろん、魁人にも怒りを向けるだろう。

だが、そんなことはありえない。

俺は、そう信じてる。

「…俺も、あの頃に比べて、甘くなつたな…。」

自分はもう悪鬼羅刹ではない。

俺は、俺のためだけじゃない。

他人ひとのために闘う。

「…しかし、何であいつは教頭が力で強行手段に出るときがくる、なんて言えるんだ？」

魁人が頼んできたこと。

それは相手が力できたときの対処だ。

何で、強行手段に出るなんて言えるんだ？

…まあ、どーでもいいか。

…あいつだし、仕方ない。

俺は、信頼されてこの頼みを受けた。

その分の働きはするぞ。

第27話 仲間たちの思い。(後書き)

遅くなって本当にすみませんでした…。
それでいてやっぱり短いという…。

…いやあ、難しいなあ。(汗)

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

どうぞ、よいお年を…。

第28話 清涼祭1日目、開始！（前書き）

明日受験なのに何やってんでしょうかWWW

皆さんはこんな人間になっちゃ駄目ですよ？（殴

では、どうぞ！

第28話 清涼祭1日目、開始！

「…絶対1時間も必要ないよな…。」

魁人は清涼祭当日の朝、少し愚痴をこぼしながら教室に入る。

清涼祭の日の朝は、いつもの登校時間より1時間早い登校が義務付けられる。

当日の朝の仕上げをするように、と言われているが…。

「…装飾が崩れてないかぐらいしかねえだろ…。」

Aクラスはもう完璧に用意を整えているため、ほとんどすることがない。

…まあ、魁人はいつもの1時間半前といういくら何でも早い時間に来たわけだが。

こういうとき、魁人は変に真面目である。

「…早すぎたな。寝るか。」

当然だが、こういうときには寝ることしかない。

…あくまで、魁人の場合は。

「え〜！？じゃあ2人共結局誘えなかったの！？」

愛子の叫び声で目を覚ます。

「だ、だって、言いだせる機会が…」「いっぱいあったよね？」「…はい。」

「恥ずかしくて…。」

魁人が顔を上げると、優子と美穂がうなだれていて、それを呆れたように見ている愛子がいた。

「まったく…、そんなんじゃいつまでたっても緑野くん気付いてもらえないよ？」

「…俺がどうかしたか？」

「「ひゃあ!？」」「」

自分の名前が出たので、魁人は優子と美穂の後ろから声をかける。

「いや、この2人が」「言わないで(下さい)！？」」「」

「…まったく…何だか分からないが、言いたいことがあるなら、ちゃんとと言わないとわからないからな？」

そう言って、魁人は自分の席に戻り、また眠りにつく。

「まさか、あれだけ時間があって2人共緑野くんを召喚大会に誘えないとはね…。」

「うう…。」

「…できれば普通に接客したかったなあ…。」

ついに清涼祭が始まり、やはりAクラスは注目されているのか多くの客が来ている。

今、魁人はいつでも接客できるように女装している。

ただ、Aクラスには女子が多いため、接客を女子に任せ、魁人は基本調理係になっていた。

魁人が接客をしたい理由は2つある。

1つ目はその方がおもしろいことがありそうのため。

2つ目は教室内にいた方が不測の事態に対応しやすいためだ。

「注文だ！チョコパフェ、2つ頼む！」

「分かった〜！」

魁人は明るい返事をして調理に取り掛かる。

「ちなみにパフエにも別の名前がつけてあるけど、厨房に注文するときは分かりやすく短く言ってるんだよ」

…誰に説明してるの？

「え、読s「やめよーか。」」

まったく、ちゃんと考えて発言してよ…。

「サーセン」

…謝る気ねえな。

ま、いーや、放っておこつ。

そついう風に創ったの俺だし w w

脱線はここまでにしようか。

つまり簡単に今の状況を言つと…。

いつでも接客にまわれるように女装している魁人が調理班で奮闘している、と。

「…今、あつちで何かあつても、何もできないんだよね…。」

しかし、やはり教頭がいつ仕掛けてくるか分からないので集中できないようである。

「緑野！こつちが人手足りなくなつたから、ちよつとホールにまわつてくれ！」

「待つてました！」

願つていたホールへの呼び出しがかかり、魁人はホールへ飛び出す。

「……こんなに多いの？」

そこで見たのは、多すぎる人たちで埋め尽くされたAクラスの教室^{はす}だった。

「…ま、頑張るかな」

だが魁人は怯まず、逆にかかつて来いと言わんばかりに仕事へ向かった。

「いや、Aクラスはやっぱり違うな！」

「だよな。Fクラスなんて虫やら蜘蛛の巣やらでいっぱいだったからな！」

魁人がホールにまわって少し時間が経った。

店にやってきた3年生らしいモヒカンと坊主が大声でそんなことを言い始めた。

「…うるさいな…。」

魁人も少しキレ気味に小声で言う。

「…雄二に伝えるか。」

Aクラスに対する悪口ではないため、大きいことは言えず、とりあえずFクラスの雄二に連絡をとる。

「…雄二？」

『何だ魁人。何かあったか？』

「こっちのクラスに迷惑なやつがいてな。ちょっと掃除してくれないか？」

『はあ？そんなのそっちで対処…、いや、まて…。そう言うことか。』

雄二は途中で何かに気付き、思いついたように言う。

『分かった。今からそっちに行こう。余っているメイド服があっ

たら用意してくれ。』

「分かった。」

ブツツ。

「…もう居なくなってる、か…。」

電話を終えると、既に先程の2人は居なかった。

「…………おかえりなさいませ、お嬢様。」

翔子が誰かに出迎えのあいさつをした。

「島田さんか…。やっと、来たね。」

思っていたより遅い到着に、ため息をつきながら近寄る。

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様。」

次に入ってきた明久、姫路、…あと小さい女の子を出迎える。

「お姉さん達、綺麗です！」

「ん、ありがとう」

女の子がそういつてくれたので、一応お礼を言っておく。

「…………チツ。」

雄二も入ってきた。

「…………おかえりなさいませ、今夜は帰らせません、ダーリン。」

雄二だけちよつとした「ちよつとじゃねえぞ!?」「…アレンジが加えられていた。

「…………お席に案内します。」

翔子が皆を席に案内する。

「遅いよ、雄二。」

「悪かったな。試合前だったもんでな。」

「ああ…、どーせ勝ったんだろうから、結果は聞かないよ?」

ちなみに魁人は学園長からの依頼で召喚大会に出ていることを聞いている。

「ああ。それで、掃除するゴミは？」

「もう帰った。多分、まだ来ると思うけど…。」

あ、注文はもう受けてありますよ？

「坂本、知り合い？」

「ああ、そういえばお前らは知らなかったんだな。」

雄二が改めて魁人を紹介する。

「こいつは緑野魁人。姫路なら知ってるんじゃないか？」

雄二が魁人を指差しながら言う。

「…え？緑野君って、男の子ですよ？」

「ああ、知ってるが？」

「…どっから見ても、女子よ？」

「そんなこと言われても…。」

「本当だからね。」

雄二が困ったように見てきたので、言っておいた。

「…本当に？」

「うん。」

「緑野君ですか？」

「うん。」

「…男子に負けるなんて…orz」

魁人が自分は紛れもなく魁人だと言うと、女子陣は膝をつく。

「……？どうしたの〜？」

「気にしなくていい。」

魁人が心配そうに2人を見ると、雄二は気にするな、と言う。

「……おかえりなさいませ、ご主人様。」

「おう、2人だ。中央付近の席は空いてるか？」

「…あいつらだよ。」

「やっぱりか。」

先程も来ていた3年生を指差して言うと、雄二はやはり、というように笑う。

「魁人。さつき頼んでおいたものを頼む。あと、女装用の道具もあるだろう?」

「うん、分かった。じゃあ明久を静めておいて。」

Fクラスを罵倒している2人に、今にも襲い掛かりそうな明久を雄二に任せ、魁人は道具を取りにいった。

「はい、これだよ。」

「すまないな。」

「で、これをどーするの?」

「着るにきまつてるだろう?」

魁人が持ってきたメイド服を見て、明久は尋ね、雄二は着る以外何がある、という風に答える。

「…誰が着るのかな?」

「この中で一番馬鹿なやつに決まってるでしょ?」

「だって、雄二。」

「俺はお前より馬鹿じゃない。というか、お前より馬鹿なやつがいたら見てみたい。」

「そこまで馬鹿じゃないよ!？」

「まったく。じゃあ、公平にじゃんけんで決めようよ。」

魁人が提案する。

「そうだな。あっちむいてホイで決めよう。」

「分かった。」

2人共同意し、女装を賭けた勝負が始まる。

「「じゃ〜んけ〜ん、ホイ!」」

雄二がチヨキ、明久はパー。

「まずは雄二の勝ちだね。」

見ている魁人が言う。

「あっち……」

そう言って雄二は勢いよく指を近づける。

「その手にのるかっ！」

明久は目も顔もそらさず雄二の指先を見つめる。

「向いて……」

ブスツ。

人体では普通聞こえない音になった。

「ぎいやああっ！目が、目があっ！」

「ホイ！……ふっ、俺の勝ちだな。」

目を突かれた明久が仰け反ると、雄二はその方向に指を指す。

「はっい、明久決定。」

魁人は勝負を認め、明久の負けを宣告する。

「待つて！？直接攻撃は卑怯じゃない！？」

「明久、知らないの？」

「何を？」

抗議する明久に、魁人は言う。

「『卑怯なんてのは敗者の言い訳でしかないんだよ』。」

「そんなこと男子の声で凛々しく言うことじゃないよ!？」

魁人は元の声で言う。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

姫路が心配そうに明久にハンカチを渡す。

「ありがとう。まったく、雄二の卑劣さには驚かされるよ。」

明久が涙を拭きながら言う。

「あ、あはは……。でも、きっと大丈夫ですよ。」

「そっくだよね。あんな卑怯な勝負は無効」吉井君ならきっと可愛
いと思いますっ!」「」

「…そっという問題じゃないよね。」

魁人は明久が今思っているであろうことを代読してあげる。

第28話 清涼祭1日目、開始！（後書き）

… Aクラス視点だと、小説内容の中で書けないものも出てきますね。

ま、そこは何とか出さなきゃいけないんでしょうが。

今回思ったこと。

… なんで地の文で姫路さんは『姫路』なんだろう？ W W

他の人みたいに名前の瑞希で書けばいいのに W W

… もしかしたら、次回はそうなってるかもしれないね W W

ま、他の回は面倒なので変えませんが。（殴

あ、作者は感想、アドバイス、批評、評価などつけて頂けると冷え切った指が飛んでく程喜びますので、是非よろしく願います！
…でも、批評は優しく、願います。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

バカと居眠りとAクラス

2012年1月6日16時50分発行